

本土決戦下の群馬

— 1944（昭和19）年からの県内駐屯部隊を追って —

菊 池 実

（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

はじめに

1. 本土決戦への道
2. 本県駐屯部隊と本県編成部隊
 - （ア）本県駐屯部隊
 - （イ）本県編成部隊
 - （ウ）防空部隊
 - （エ）軍後方部隊、病院、学校など

3. 本県駐屯部隊と編成部隊の検討から

- （ア）本県駐屯部隊
- （イ）本県編成部隊
- （ウ）防空部隊
- （エ）軍後方部隊、病院、学校、研究所など
- （オ）その他、不明

4. 本土決戦にかかわる県内遺跡を考える
おわりに

— 要 旨 —

本土決戦下の群馬県における本格的な軍隊の移駐は1944年7月からの歩兵第173連隊（納部隊）に始まる。県立学校2校、国民学校10校でその足跡を確認できた。45年になると、4月から5月にかけて満州からの転用部隊である、戦車第1師団（拓部隊）と独立工兵第27連隊（幡部隊）が展開、そして青葉兵団2万3,144名の本格的移駐へと続いた。この間においても部隊の移動は激しく、納部隊の移動後、青葉兵団が入れ替わるなどの事態が生じていた。また、複数の部隊が同居した学校もあった。そしてこれらの部隊は、県下の国民学校82校、県立学校5校、郡立学校1校に移駐している。

さらに高射砲部隊の移駐が国民学校5校と県立学校1校他、陸軍の飛行場に関係した部隊の配置は国民学校9校と町立学校2校で確認できた。これらは45年5月から7月にかけての移駐が多かった。さらに陸軍の3飛行場では特別攻撃隊の訓練が恒常的に行われている。

陸軍中野学校（国民学校2校・県立学校1校他）と陸軍予科士官学校（国民学校4校他）の移転や疎開は、松代大本営構想と切り離して考えることはできない。

さらに様々な軍研究所や施設、軍関係工場の疎開もあった。それらは県立学校4校、町立学校1校、国民学校15校に及んでいる。さらに食糧増産の部隊である、陸軍農耕勤務隊の足跡は45年2月から邑楽郡下の国民学校8校に残されていた。

県は1945年3月27日に分散授業計画の提出を求めた。これは疎開者の収容宿舎、軍隊の移駐或いは工場の疎開場所として校舎を使用するため、さらには空襲による危険を避ける目的などからであった。そして4月からは国民学校初等科（1年生から6年生まで）を除き、むこう1年間、すべての学業は停止となり、生徒は学校工場、軍需工場、軍用施設などへと動員されていった。

結果として、軍の足跡は県下国民学校121（重複校は1校として）校、県立学校10校、郡立学校1校、町立学校3校にも及んだ。学校現場は二部授業や分散授業で対応せざるを得なかったのである。

キーワード

対象時代 近現代

対象地域 群馬

研究対象 本土決戦・関連遺跡 学校史

はじめに

1945（昭和20）年、本土決戦下の群馬県には青葉兵団に代表される、本土決戦兵団2万3,144名の移駐があった。県下国民学校への部隊の移駐実態については、先に『研究紀要』29（2011年3月）に報告したが、その調査の過程で、すでに前年の7月頃から国民学校校舎の一部が軍の兵舎として使用されはじめたこと、そして45年にかけて青葉兵団以外のさらに多くの部隊も県内に移駐や疎開していることが判明した。そこで本稿ではこれら部隊の全容を把握して、県下国民学校への移駐状況から本土決戦下における群馬、その様相の一端を明らかにするものである。さらに本土決戦にかかわる遺跡についても言及したい。

1. 本土決戦への道

まず本土決戦体制へと傾斜していった背景を、1971（昭和46）年刊行の『戦史叢書 本土決戦準備〈1〉－関東の防衛－』や2011（平成23）年刊行の『本土決戦の虚像と実像』をもとに簡単に触れたい。

1944（昭和19）年初頭からの中部太平洋の戦況は本土戦備の急速強化を必要とした。4月、大本営は内地にある留守師団6個を一般師団に臨時編成、そして7月に臨時動員、これらの師団は野戦師団となり本土決戦準備の中核となっていった。このうち第81師団（兵団文字符一納、以下同）、第93師団（決）、戦車第4師団（鋼）、電信第6連隊をもって、大本営直属として第36軍（富士）が編成された。これが、本土決戦を想定して最初に編成された決戦兵団である。

第36軍は、作戦準備のため9月初旬から予想作戦地域の兵要地誌¹⁾の調査を実施したが、その主要な調査事項の一つに部隊の収容能力、学校、公会堂の位置と数量があった。そして第81師団は宇都宮地区、第93師団の主力は御殿場地区、一部は下志津および松本に、戦車第4師団は千葉および習志野地区に配置して訓練を実施、10月下旬からは九十九里浜、鹿島灘、相模湾方面の築城を開始した。

このころ戦況は、7月上旬にサイパン島陥落、同月下旬には米軍のテニアン島、グアム島への上陸と続いた。そしてマリアナ諸島の陥落により絶対国防圏は崩壊、日本の防衛線は小笠原・沖縄・フィリピンまで後退した。内地の築城に着手した10月下旬、連合軍はレイテ島に本格的な上陸を開始、大本営は第36軍を防衛総司令官の隷下に編入して同軍の関東地方での使用を指示した。

しかしレイテ決戦は敗北、翌45年1月20日に本格的な本土決戦を想定した「帝国陸海軍作戦計画大綱」が決定された。そして本土作戦のために新設する部隊として一般師団40、混成旅団22、これに付随する軍直轄部隊など総計約150万に達する兵力の動員、いわゆる「根こ

そぎ動員」が実施された。新設兵団の動員は、2月下旬（第1次兵備－沿岸配備の16個師団の動員）、4月上旬（第2次兵備－機動攻撃に任ずる8個師団の動員）、5月下旬（第3次兵備－19個師団の動員）の三次わたり、さらに満州などからの兵団転用を行った。

2. 本県駐屯部隊と本県編成部隊

すでに記したように本土決戦の準備は1944年7月から本格化する。県内の国民学校校舎に部隊の移駐が認められるのは、まさにこの時期からである。それではどのような部隊が県内に配置されたのであろうか。参考になるのは『群馬県復員援護史』の記述である。そこには県内における本土決戦配備と郷土部隊を次のようにまとめている²⁾。ただし誤りも散見されるので、防衛研究所所蔵の「第三十六軍関係資料」、「通称号に関する綴」、「陸軍部隊調査表（其一～其四）」³⁾や『戦史叢書 本土決戦準備〈1〉－関東の防衛－』所収の「付表第一」「付表第二」に記載されたものをくくりに記した。

（ア）本県駐屯部隊－第202師団（青葉兵団）と独立工兵第27連隊（幡第13001部隊、勢多郡富士見村）。『群馬県復員援護史』には、この二つの部隊が本土決戦における本県配備部隊として記されているが、このほかに戦車第1師団隷下部隊（拓部隊）の移駐もあった。これについては次節で触れる。

（イ）本県編成部隊－これは本土決戦に備えて本県の東部第38部隊（高崎）と東部第41部隊（沼田）などで編成され、それぞれの任地へ派遣された部隊を指している。なお、東部第41部隊関係については、これが化学戦部隊であることから1987（昭和62）年刊行の『陸軍習志野学校』⁴⁾の記述も参考とした。

〔東部第38部隊関係〕

○第81師団歩兵第173連隊（^{ノウ}納第2878部隊）－1945年4月22日、駿河湾方面の陣地構築に出動し、爾後第36軍隷下に入り、決戦部隊として茨城県境付近〈第三十六軍関係資料－連隊本部は静岡県庵原郡富士川町国民学校、戦史叢書－富士川右岸、沼津〉に位置した。

○第214師団歩兵第521連隊（^{トキワ}常磐第30858部隊）－同年6月10日、栃木県烏山付近に移動し、第36軍隷下に入り、決戦に備えた。

○第351師団歩兵第330連隊（^{アカギ}赤城第27733部隊）－同年6月26日、福岡県に移駐し、第2総軍隷下に入り、九州方面の決戦に備えた。

○第151師団歩兵第214（^{イフ}陸軍部隊調査表－435）連隊（護字第22558部隊）－同年4月15日、茨城県中野村付近に移駐し、第51軍隷下に入り、鹿島灘方面の決戦に備えた。

○第28独立通信作業隊（^{ハタ}幡第36427部隊）－同年5月23日、独立通信作業隊として東京都に移駐し、首都防

衛に任じた。

○第25兵站地区隊本部・兵站勤務第45中隊（健第4820部隊）が水戸付近に展開した。

○独立混成第6〈戦史叢書－115・116〉旅団 建第27760・27771部隊〉－同年7月10日、歩兵第700・701大隊をもって〈独立混成第115旅団〉を編成、第705・706大隊をもって〈同第116旅団〉編成し、東部第38部隊（高崎）〈戦史叢書－115・茨城芝崎、神之池周辺、116・終戦時編成未完〉において決戦に備えた。

〔東部第41部隊関係〕

化学戦部隊としての迫撃連隊、迫撃砲大隊が編成されている。『群馬県復員援護史』では、それを迫撃第7大隊、同23大隊（以上千葉）、迫撃第8～11大隊、同33（32の誤りか－筆者注）大隊（以上沼田）としている。しかし『陸軍習志野学校』で確認していくと、第214師団迫撃第214連隊（常磐第30859部隊）が1945年5月、沼田で編成されている。部隊の展開地は北関東であるが、敗戦時の所在地を旧厚生省資料では高崎、「第三十六軍関係資料」や『戦史叢書』では栃木県芳賀郡真岡町となっている。このほかに、迫撃砲第4大隊（敗戦時宮崎）、同第6・7大隊、同第23大隊（以上、敗戦時千葉）、同第32大隊は編成未完となっている。

（ウ）防空部隊

中島飛行機太田製作所と同小泉製作所防衛のために高射砲部隊が配置され、県下所在の飛行場（館林・桐生・新田・太田・尾島・前橋）には航空部隊、航空錬成教育隊、学校などが配備され、防空と航空作戦に任じていた。晴は高射第1師団、帥は航空総軍、燕は第1航空軍隷下部隊を指す。

○高射第1師団独立高射砲第4大隊（晴第1955部隊、新田郡太田町）

○航空本部教導飛行師団第2教導飛行隊（風部隊、山田郡大間々町）

○航空総軍航空輸送部第2輸送飛行隊（帥部隊－『群馬県復員援護史』では「師」としているが誤りである。新田郡太田町）

○航空総軍第20戦闘飛行集団飛行第112戦隊（帥第34218部隊、新田郡）

○同第101独立整備隊（帥18959部隊、新田郡太田町）

○同第116独立整備隊（帥第18981部隊、邑楽郡館林町）

○同第123独立整備隊（帥第18988部隊、碓氷郡安中町）

○第1航空軍第4航空通信団第64対空無線隊（燕第19551部隊、邑楽郡中野村）

○同第165・166・169・170飛行場大隊（燕第18939・18940・18941－新田郡、18942部隊・邑楽郡館林町）

以上が『群馬県復員援護史』に記された防空部隊である。しかし、敗戦直後に軍が占領軍への説明資料として作成した「航空部隊一覧表」⁵⁾、1947年にまとめられ

た「航空部隊配置要図」⁶⁾には、上記部隊のほかに次の部隊が記載されている。

○第1航空軍飛行第14戦隊（燕第9906部隊、新田、兵員数532、重爆）

○第1航空軍第165独立整備隊（燕第19394部隊、新田郡綿内村、兵員数172）

○第1航空軍第306独立整備隊（燕第19086部隊、新田生品、兵員数172）

○航空総軍第182独立整備隊（帥第19067部隊、館林、兵員数172）

また、教導飛行師団第2教導飛行隊と第20戦闘飛行集団飛行第112戦隊は、1945年7月に廃止された明野及び常陸両教導飛行師団のことである。

（エ）軍後方部隊、病院、学校など

東部第38部隊（高崎）、東部第41部隊（沼田）、前橋連隊区司令部（前橋）、前橋憲兵隊（前橋）、高崎・前橋・沼田・渋川（渋川は陸軍航空本部及び航空総軍直轄部隊）の各陸軍病院、前橋陸軍予備士官学校（桃井）、浦和陸軍糧秣廠高崎集積所（高崎）、東京陸軍補給廠高崎集積所（高崎）、東京被服廠安中支所（安中）、陸軍岩鼻火薬製造所（臣第29612ろ部隊、岩鼻）、陸軍中野学校（東部第33部隊、富岡）、留守業務部（吉井）、地区司令部、地区第1特設警備隊、第18特設警備工兵隊（東部第13323部隊、太田）、特設警備第13中隊（東部第2871部隊、太田）、第3自動車隊（前橋）、前橋臨時兵站業務班（前橋）、第2農耕勤務隊、東京地区鉄道司令部第178停車場大隊（線、高崎）、同第19独立鉄道作業隊（線第33969部隊、高崎）などである。

『群馬県復員援護史』の記述は、その後『群馬県史』⁷⁾にも踏襲されていったために、部隊名や敗戦時の位置などの誤りもそのままとなっている。本稿では可能な限りその訂正も試みたい。

3. 本県駐屯部隊と編成部隊の検討から

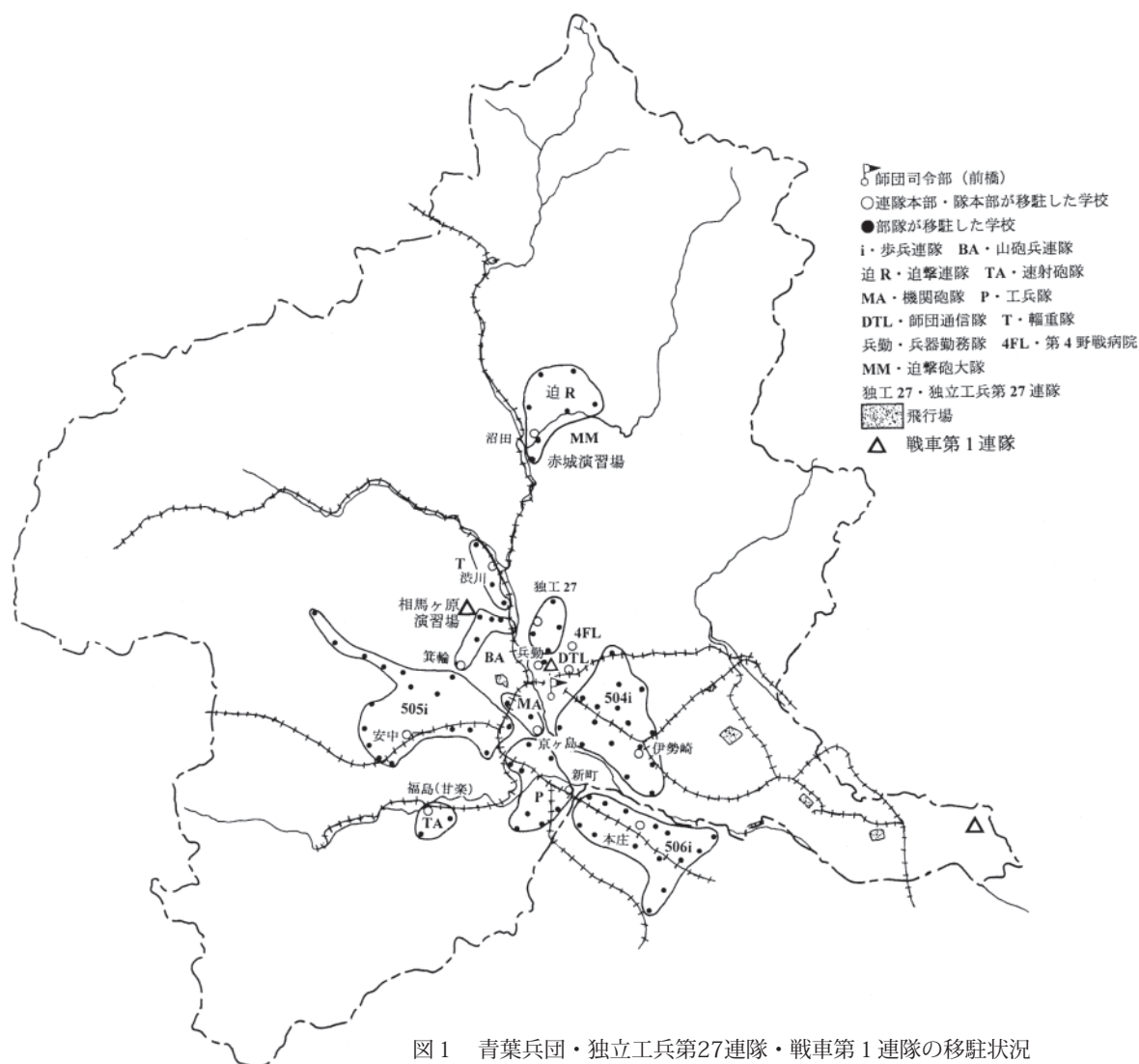
それでは『群馬県復員援護史』の分類にもとづいて、以下記述する。

（ア）本県駐屯部隊（図1）

○第202師団（青葉兵団）

部隊の県内移駐の詳細については『研究紀要』29を参照されたい。ここではその簡単な概要と、その後の調査で判明したことを記す。

青葉兵団の移駐は1945年5月中旬から6月初旬に先遣隊が、本隊は6月下旬から県内に移駐した。鉄道沿線を中心に、当時の前橋市、高崎市、伊勢崎市、佐波郡5村、勢多郡1町・5村、碓氷郡2町・8村（里見村と烏渚村を追加）⁸⁾、群馬郡4町・16村（里見村を削除）、利根郡1町・6村、北甘楽郡2町・1村、多野郡2町3村におよんだ。現在の行政区域では6市3町3村（市－



前橋・高崎・伊勢崎・沼田・渋川・安中・町一玉村・吉岡・甘楽・村一榛東・昭和・川場)となり、北は川場村から南は高崎市新町、東は伊勢崎市から西は安中市まで、そして埼玉県下の児玉郡1町・8村(現本庄市・上里町)、大里郡6村(現深谷市・寄居町)の広範囲であった。さらに国民学校で見ると、前橋市2校、伊勢崎市4校、佐波郡5校、勢多郡10校、碓氷郡10校(里見村国民学校と烏淵村東部国民学校を追加)、群馬郡23校(里見村国民学校を削除)、利根郡7校、北甘楽郡3校、多野郡5校の計69校、さらに県立学校など4校(2校追加)におよんだ。県立学校などの追加は、その後の調査によって境高等女学校(現県立伊勢崎高等学校)の「裏校舎の作法室に「青葉隊」という軍隊の一部の兵隊が泊まり込み、校庭に据え付けた2・3門の大砲を使って軍事訓練をした」⁹⁾ことが明らかになったからである。また、佐波郡立農業学校(現県立伊勢崎興陽高等学校)の講堂が伊勢崎市南国民学校に移駐した歩兵第504連隊の連隊本部の倉庫となった¹⁰⁾。

○独立工兵第27連隊（幡第13001部隊）

戦車第1師団と同様に満州から転用された機械化工兵の独立部隊である。隊員約1,000名は1945年5月2日から9日にかけて新潟港に到着した。10日、連隊の將校2人は、赤城山麓が地形的に連隊の特殊訓練に適し秘密保持にも良好だとして、前橋市に急行。前橋警察署で下田署長に会って種々問い合わせ、更に富士見村に急行し、古屋村長に会って状況を確認している。第36軍からは、同地区は既に第202師団の展開予定地域であるので、同師団が了承すれば結構であるとの回答があり、連隊長は仙台に急行。同師団と調整した結果、連隊の富士見村地区の使用に快諾を得、5月下旬勢多郡富士見村と南橋村の各国民学校に移駐した。連隊の部隊史によると、その状況は次のとおりである¹¹⁾。

勢多郡富士見村原国民学校（現前橋市立原小学校）に連隊本部・強電隊・材料廠、そして連隊の被服修理工場は学校西の小さな森に、学校北西の横室十二山に材料廠の器材や資材、学校裏の村の集会所が糧秣倉庫となった。

時沢国民学校（現前橋市立時沢小学校）には第1・第2中隊である。同校の「当直日誌」5月23日の記事に「幡部隊将校3名来校」とあり、翌日の記事欄には「幡部隊先遣隊到着ス」となっている¹²⁾。赤城街道と学校の間には幅の狭い旧道があり大きな松が両側に並んでいたが、その松と松の間に穴を掘って大釜を据付けて中隊の臨時炊事場に、学校の東方にあった鍛錬場と呼んでいた広場を兵器・器材の集積場としていた。石井国民学校（現前橋市立石井小学校）には第3・第6中隊、勢多郡南橋村桃川国民学校（現前橋市立桃川小学校）に第4中隊、その兵器・器材の集積は敷島公園脇の松林、細井国民学校（現前橋市立細井小学校）に第5中隊、そして兵器・器材の集積は学校裏の八幡山であった。

このように糧秣・被服などは村の公会堂や工場・倉庫などを一時借用して収納、兵器・車輛などは森や林、河原の繁みなどを利用していった。そして初年兵・補充兵の仕上げ教育、大河原地区の六角堂で幹部候補生教育、赤城山中腹の急増演習場で訓練が行われた。訓練内容は各種爆薬の取扱い、遮蔽・潜伏攻撃拠点の構築、あるいは破甲爆雷・手榴弾・手製爆弾による戦車攻撃などであった。

8月5日夜半から6日未明にかけての前橋空襲では、細井国民学校に移駐していた第5中隊の車輛2台が焼失している。12日、連隊はその主力をもって茨城県鹿島地区に転進、再び富士見村に戻ってきたのは敗戦後の8月24日である。

連隊本部・強電隊・材料廠が移駐した原小学校の「学校誌」には、次の回想が掲載されている。「後校舎は兵隊さんの宿舎になり、たくさん働いて居りましたので私達は全部前校舎を使用しました」「校庭にも戦車、自動車、ドラム缶等の軍事物資がいっぱいだった」¹³⁾。また、第1・第2中隊が移駐した時沢小学校の「学校誌」には、「校舎に兵隊さんが入って来ました。戦車隊で私たちを守ってくれるということで、校舎の半分を使うことになりました。私たちは狭いところで勉強しなければならませんでした。校舎の中には銃や弾丸がいっぱい置いてあり、子供心にも異様に感じました。（中略）学校の庭にも穴を掘って、大きな戦車を二台も三台も埋めました」¹⁴⁾とある。この回想の中にある、穴を掘って戦車を埋めたとはどういうことなのか。実は敗戦直後、次のことが秘密裏に行われていったのである。

連隊の解散式は8月30日に原国民学校で行われている。この間、連隊の特殊兵器、それは被索引車を含む高压発電車（中戦車）および小作業機・迫撃機用の発電車（軽装甲車）類96輦であったが、これらの破壊焼却、残骸埋没、利根川への投棄が行われたのである。1954年に刊行された『富士見村誌』には次の記述が見られる。「特に8月28日3時頃より夜にかけて戦車を爆砕する轟

音は付近にとどろいた。（中略）戦車を爆砕した芳窪一帯の地は、開墾地に指定されて開拓が進んでいるが、未だに赤さびた鉄屑が残存して」¹⁵⁾いる状況であったという。

なお、焼却処分した特殊兵器の残骸を捨てたところは、当事業団のすぐ近くに所在する利根川に架けられた板東橋で、ここから川底に投棄された。その後、投棄された特殊兵器の残骸は、米軍の命令で県による引き揚げが行われている。

以上、連隊の足跡は勢多郡下の国民学校5校で確認できた。現在、部隊の終焉の地となった前橋市富士見町にある忠霊塔の一隅に、部隊関係者によって「興源之碑」（1975年8月）が建立されている（写真1）。



写真1「興源之碑」（1975年8月建立）

○電信第30連隊（幡第12616部隊）

前橋市久留万国民学校の「昭和二十年度当宿直日誌」5月22日以降の記事にも「幡部隊」が登場する。22日「小黑板貸与」、6月28日「講堂貸与（午後七時より八時まで約一時間）」、7月12日「疎開、ピアノ、シン三、月田校へ、幡部隊のトラックニテ」、同21日「火鉢四コ貸与」、そして敗戦後の8月18日「幡部隊箱一ヶ寄贈ス」、翌日「長野りんご若干寄贈うく」、そして8月29日の宿直記事に「本校に居タ幡部隊は東京神田方面ニ出発スル旨お知らせがありました」¹⁶⁾とある。同校に移駐していた「幡部隊」は独立工兵第27連隊ではなくて、次の史料¹⁷⁾から第12方面軍通信隊の電信第30連隊（前橋中隊）である。

軍 密

十二方作命第一二号

第十二方面軍命令 三月二十一日一六〇〇

東 京

一、方面軍ハ電信第三十聯隊ノ移駐ヲ実施セントス

二、電信第三十聯隊長ハ四月上旬迄ニ各々有線約一中隊

及無線ノ一部ヲ千葉、水戸、前橋附近ニ五月上旬迄ニ残部（主力）ヲ川越附近ニ移駐スベシ
三、（以下略）

十二方参指第六号

十二方作命第一二号ニ基ク

方面軍参謀長指示

一、二、略

三、移駐地ニ於ケル主要ナル利用建物ハ左記ノ通トス

川越附近 （略）

千葉附近 （略）

水戸附近 （略）

前橋附近 久留万国民学校、天理教支庁

以下、略

昭和二十年三月二十一日

第十二方面軍参謀長 高嶋辰彦

○第12方面軍（幡第12345部隊）の移駐

1945年7月12日、県立沼田中学校（現県立沼田高等学校）に50名の兵隊が設備準備のため来校、翌13日に幡第12345部隊飯田隊の兵隊130名が校舎3階の4教室に駐屯することになった。そして建物の偽装工作や迷彩を施すなど行っている。第12345は第12方面軍司令部の通称号であるが、その飯田隊とはどのような部隊であったのかは不明である。そして9月12日午前5時に復員式を行っている¹⁸⁾。なお、沼田中にはこれに先立ち陸軍気象部の校舎使用も行われている。

○戦車第1師団戦車第1連隊（拓第12071部隊）

第36軍の戦闘序列に編入された、満州からの転用部隊としては戦車第1師団があった。転用時の人員は1万33名で、師団司令部（師団長以下477名）、戦車第1連隊（連隊長以下887名）、同第5連隊（同886名）、機動歩兵第1連隊（同2,844名）などからなった。

前橋に駐屯した戦車第1連隊（1945年5月末日現在の人員889、戦車数60輛）¹⁹⁾の移動日程を見ると、3月22日、満州国牡丹江省寧安（現中国黒龍江省）を出発、釜山港から4月7日に新潟港上陸、そして鉄道輸送で9日前橋に到着した。相馬ヶ原廠舎（前橋陸軍予備士官学校）に駐屯、5月末日になって移動するまでの間、戦闘・射撃・挺身切り込み訓練を行っている。この連隊の第5中隊第3小隊長であったのが福田定一少尉、若き日の司馬遼太郎である。彼は東部第38部隊への伝令時、高崎駅前の豊田屋旅館に宿泊しているが、この時、女優の森光子（当時は前座歌手として慰問活動を行い、東京大空襲の後、高崎の知り合いの旅館に疎開、高崎で敗戦を迎えている。）にあっている²⁰⁾。その後、同連隊は栃木県の佐野市周辺に移動する。早乙女務著『あの夏の日の司馬遼太郎』（2006年）には当時の関係者の回想をも

とに、その状況が詳しく紹介されている²¹⁾。

部隊の足跡は現在のところ次のとおり確認できる。

前橋市敷島国民学校（現前橋市立敷島小学校）の「昭和二十年度日直簿」²²⁾に戦車部隊の記事が認められる。4月7日に「戦車部隊ヨリ食糧搬入保管」、翌日「戦車部隊ヨリ軍人一名」来校、そして11日に「戦車部隊到着」である。その人数については150名としている²³⁾。戦車連隊は連隊本部と第1中隊から第5中隊、整備中隊から編制されている。150名は1個中隊の規模となる。16日の朝礼では「兵隊サンノ邪魔ヲセヌヨウ」伝えている。そして7月8日の記事に「拓部隊 机・腰掛・返却」とある。戦車第1連隊が新潟港に上陸したその日には、すでに部隊食糧が学校に届けられた。11日は前橋に到着して2日目のことである。しかしながら拓部隊の記載だけでは、移駐した部隊の詳細については不明である。なお、部隊が次の場所に移動した後、学校には青葉部隊が移駐することになる。

また、邑楽郡西谷田村国民学校（現板倉町立北小学校）には5月13日、拓部隊中澤隊本部が到着している。「突然本校に軍隊が駐営し校舎の半分が兵舎となり、教室も二クラス一室にて授業を受ける状態であった。」「夏休みが終わって登校してみると、駐屯していた戦車隊の兵隊さんが解散準備に大忙し」、そして9月10日に復員を開始している²⁴⁾。この部隊についても詳細は不明であるが、機動歩兵第1連隊の部隊である可能性が高い。この連隊は栃木県下都賀郡藤岡町（現栃木市）一帯に移駐しているからである。西谷田村国民学校とは比較的近い位置関係にある。

以上、県内では前橋陸軍予備士官学校（群馬郡桃井村）と国民学校2校（前橋市・邑楽郡西谷田村）でその足跡を確認できる。ただし前橋市久留万国民学校の「昭和二十年度当宿直日誌」4月16日に気になる記事がある。「軍隊ノ作業、或ハ軍用物件ニ児童ハ奇異ノ目ヲ以テ蜚集シタガル風ヲ性トシテモ□一般注意事項トシテ朝礼ニ於テ注意」²⁵⁾しているこの日は、敷島校でも朝礼時、児童に注意をうながしていること、そして翌日と21日午前中に講堂を部隊に貸与している。すでに記したが、5月22日以降の記事には「幡部隊」が登場する。この部隊（電信第30連隊前橋中隊）は4月上旬までには移駐していることを考えると、この記事はその「幡部隊」を指すものか、あるいは4月16日の日付から考えると拓部隊が該当する可能性も指摘できよう。

（イ）本県編成部隊（図2）

○第81師団歩兵第173連隊（納第2878部隊）他

本土決戦部隊として県内で最初に確認できるのは、第36軍隷下の第81師団第173連隊である。師団は総計2万338名にのぼるが、歩兵第173連隊は連隊本部（連隊

長以下206名)、3個大隊(1個大隊は大隊長以下1,253名)、歩兵砲中隊(中隊長以下155名)、速射砲中隊(中隊長以下106名)、通信中隊(中隊長以下142名)、作業中隊(中隊長以下173名)、乗馬小隊(小隊長以下38名)の総計4,579名、馬匹915である²⁶⁾。

なお、部隊の兵団文字符は「納」であったが、部隊の自活のために営農活動もしていたことから「農」部隊とも呼ばれていた。この連隊は1945年4月に第53軍に配属されて駿河湾の沿岸築城に出動している。現在のところ県内での足跡は次のように確認できる。ただし、納部隊といっても師団隷下部隊の全体を指しているので詳細を知るには、たとえば「納第〇〇〇〇部隊」まで確認する必要がある。しかし「学校日誌」「学校沿革史」「学校記念誌」などには、そこまで記されたものは極端に少ない。

1944年7月から群馬郡桃井村国民学校(現榛東村立北小学校)の裏校舎と講堂を兵舎として使用したことが判明している²⁷⁾。さらに同年9月に入隊した人の回想には「兵営は、高商の新築された校舎」²⁸⁾とあり、県立高

崎商業学校(現県立高崎商業高等学校)にも部隊が駐屯していたことがわかる。このことは1945年2月24日、納部隊による吾妻郡岩島村(現東吾妻町)の特産物である大麻(航空部隊の地上標識用縄に使用)の買付が行われ、その現物の送り先が高崎市上和田町高崎商業学校内納、第2878部隊経理室となっていたことから確認できる²⁹⁾。もちろんこれだけでは部隊の収容は不可能である。同年4月27日の入営者の回想に「当時の三十八部隊に入営、宿舎になっている相馬村小学校へ。全部で二百人位はいたと思います。校舎の東の玄関を入ったところの二階を新兵が使い、相馬ヶ原で訓練、原隊は納第二八七八部隊」³⁰⁾とあり、群馬郡相馬村国民学校(現榛東村立南小学校)も兵舎として割り当てられていた。このほかにも学校誌で確認できるのは、碓氷郡下の豊岡村国民学校(現高崎市立豊岡小学校)と八幡村国民学校(現高崎市立八幡小学校)である。豊岡村国民学校では1945年4月22日、「駐屯の兵隊さん、静岡方面に本土決戦の守りとして早朝出発移動せり」³¹⁾とある。部隊名は記されていないが、静岡方面に移動していることから

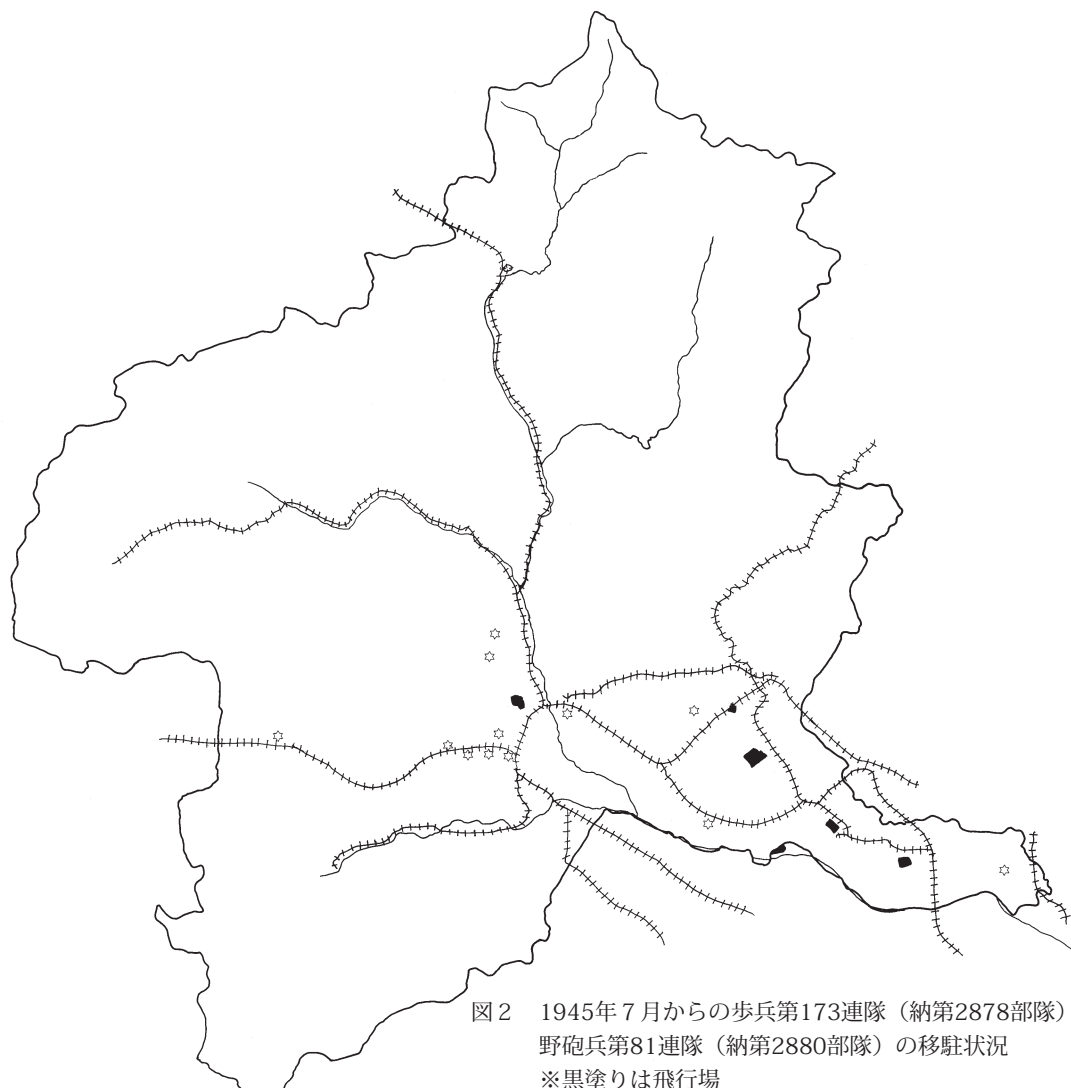


図2 1945年7月からの歩兵第173連隊(納第2878部隊)と野砲兵第81連隊(納第2880部隊)の移駐状況
※黒塗りは飛行場

歩兵第173連隊の部隊であることがわかる。また八幡村国民学校には5月、「南平屋校舎に兵隊さんが入り、校庭に馬屋が建てられ、並木参道も八幡宮前から鳥居まで、軍馬がつながるようになりました。この軍隊は納部隊の騎兵一個中隊ほどでしたが、終戦直前に移動」³²⁾とある。連隊の乗馬小隊であろうか。同じく5月16日には県立前橋中学校（現県立前橋高等学校）いた納部隊の引っ越しがあった³³⁾。6月9日には邑楽郡伊奈良村国民学校（現板倉町立西小学校）の中央校舎の教室に納部隊1個小隊が駐屯し、初等科1年生から3年生の9学級が6学級に合併される事態となった³⁴⁾。また月日は明確ではないが、碓氷郡板鼻町国民学校（現安中市立碓東小学校）「校舎の一部には「農部隊」と呼ばれた軍隊が来ていました。武器を持っていない軍隊で天神山の松の根を掘ったり、開墾作業をやったりしていました。」³⁵⁾や群馬郡六郷村国民学校（現高崎市立六郷小学校）³⁶⁾でも部隊の存在が確認されており、複数の国民学校と県立学校に駐屯していたことがわかる。ただし移駐の時期は異なっているために、歩兵第173連隊に限定できないかもしれない。納部隊から青葉部隊に校舎提供が変更されていった学校は、桃井・相馬・豊岡・八幡の各国民学校と前橋中学校で確認できた。なお、前橋市敷島国民学校の「昭和十九年度日直簿」と「昭和二十年度日直簿」³⁷⁾にも納部隊の記事が認められる。それは1945年1月21日と4月1日である。ただしこれらの記事は干し草の一部を取りに来たことや、茶殻代金が届けられたことであり、部隊の直接移駐を記すものではなかった。

ところで、部隊名は不明なものの1944年から45年4月にかけて部隊の移駐が認められる学校がある。たとえば佐波郡境町国民学校（現伊勢崎市立境小学校）では「十九年からは陸軍の野砲隊の兵舎に校舎の一部が使われた。現校舎の玄関から東の階下四教室である。（中略）このため給食施設を軍隊に提供したので、給食は中止した。（中略）戦争が終わるまで児童と軍隊との寄り合い世帯がつづいた」³⁸⁾。この部隊は第81師団の野砲兵連隊の一部と思われる。また中には「昭和二〇年正月頃、赤堀村大字間野谷に青葉部隊一小隊が分駐し、（中略）民家に分宿し又小学校（佐波郡赤堀村国民学校のことかー筆者注）にも同部隊が止宿していた。（中略）防空壕を掘ったり竹槍訓練をしたりの日常だった」³⁹⁾との記述や碓氷郡坂本町国民学校（現安中市立坂本小学校）で「四月には青葉部隊が学校に駐留する為校舎の一部を提供した」⁴⁰⁾と記載されているのは、いずれも誤りと思われる。青葉部隊の編成は1945年4月、そして本県に移駐するのは5月から6月初旬に先遣隊が、本隊は6月下旬からである。おそらくは納部隊と混同したものであろう。

部隊の足跡は7月にも碓氷郡烏淵村（現高崎市倉渕町）に兵士約50名がきて相間川入の大平で生産された薪炭

の運搬にあたっていることが確認されている⁴¹⁾。

以上、県内における納部隊の足跡は、1944年7月から45年敗戦直前まで、県立学校2校と国民学校10校（このうち不確実3校）で確認できた。

○第214師団歩兵第521連隊（常磐第30858部隊）

県内では常磐部隊の移駐は認められないが、邑楽郡赤羽村国民学校（現館林市立第五小学校）の「沿革史」に次の記事が残る。1945年の「七月一日 常磐三〇八五八部隊鈴木部隊二豚児ヲ売却ス」⁴²⁾。このことから栃木県内でも群馬に比較的近い所に部隊の移駐が考えられ、さらには食糧の自給に追いつめられた軍隊の有様が垣間見える。

（ウ）防空部隊（図3）

○高射第1師団高射第117連隊（晴第4101部隊）、同第115連隊（同第1901部隊）

1945年7月中旬、高射第1師団高射砲第117連隊の主力（高射砲4個中隊3,449名ー7センチ高射砲4門、8センチ高射砲18門、電波標定機Ⅱ型・Ⅲ型・改Ⅲ型、照空2個中隊）と高射砲第115連隊の第3大隊（照空3個中隊）が、空襲によって壊滅した横浜地区から前橋と高崎地区に派遣された。この時点ではまだ空襲被害のない同地の防空に当たらせるためであった。敵機は主として利根川に沿って飛来するものと判断して、前橋と高崎の以東に主力を配置した。高崎では新高尾、大類、競馬場、前橋では六供、元総社である。また第117連隊照空隊と第115連隊照空隊の照空燈計25基は、利根川を挟んで東に115、西に117連隊照空隊が中隊距離間隔概ね5キロに配置された。その陣地は粕川、宮城、富士見、箕輪（弥勒寺付近）、相馬ヶ原、西横手、藤岡方面であった⁴³⁾。

これらの高射砲部隊が移駐した学校は次のとおり確認できる。群馬郡新高尾村国民学校（現高崎市立新高尾小学校）では7月、校舎を軍隊が使用したため分散授業を強いられている⁴⁴⁾。また一時的に使用されたのが高崎市東国民学校（現高崎市立東小学校）であった。「七月十四日（土）晴（前略）夕方、移動中の陸軍兵士が続々校庭に集合する。晴（陸軍の符号名称）部隊との由。中校舎二階と講堂を宿舎に開放。（中略）兵隊さんの水筒がほとんど太い竹筒であったのには驚かされた。（中略）七月二十日（金）曇のち晴（前略）全部隊移動す」⁴⁵⁾。この記録から次のことがわかる。高射砲連隊は7月14日に鉄道輸送で高崎駅に到着、近接する東国民学校に一時的な宿営、準備を行って、競馬場や大類に向かったものと判断される。その大類の陣地は、上大類の飯玉神社より西方へ300メートル位の桑畑の中に急遽構築されたものであった。「二門位であつたろうか。数十名の兵員は村の西南部に当る十戸程の民家に分宿し、飯玉神社東



図3 1945年の部隊等移駐・疎開状況

側の空壕の中に急造の待機所を設け（中略）村から南南西に当る方向からは毎夜二本の照空灯の光芒」⁴⁶⁾があったという。また、六供の部隊は県立前橋第二工業学校（現県立前橋商業高等学校）の校舎を使用していた⁴⁷⁾。

照空隊については碓氷郡里見村（現高崎市里見町）の事例が判明している。「六月頃、照空隊というのが来た。人員は十数名であった（中略）下里見諏訪山の南面の畑二反歩位の地取りに地下壕を掘り、照空燈を据え付けその操作する附属設備も皆地下で、それに地下の連絡道路を作り、係員の宿営も半地下に茅葺き屋根を作り（中略）宿営等の設備品は殆どないので、不足勝な資材を村で整えてやるという厄介な部隊であった」⁴⁸⁾という。このほか、勢多郡宮城村と佐波郡芝根村の各国民学校でも照空隊を確認できる。

なお、上記に先立つ1941年8月末、中島飛行機太田製作所や小泉製作所防空のために東部第1992部隊（高射砲第118連隊―筆者注）の林隊約130名が高射砲陣地



写真2
高射砲の砲座と説明板

表1 部隊の移駐状況

部隊と学校	部隊名	人数	移駐時期	校舎・校庭の使用状況	学校側の対応	その他
独立工兵第27連隊(幡第13001部隊) 勢多郡内 富士見村原国民学校(現前橋市立原小学校) 富士見村時沢国民学校(現前橋市立時沢小学校) 富士見村石井国民学校(現前橋市立石井小学校) 南橋村桃川国民学校(現前橋市立桃川小学校) 南橋村細井国民学校(現前橋市立細井小学校) 電信第30連隊(幡第12616部隊) 前橋市久留万国民学校	連隊本部・強電隊・材料廠 第1・第2中隊 第3・第6中隊 第4中隊 第5中隊	1,000名	1945年5月下旬～8月30日 同年5月24日～8月30日 同年5月下旬～8月30日 同上 同上	後校舎、校庭に軍事物資 校舎の半分、校舎内に銃や弾丸		校庭に戦車を埋める
第12方面軍(幡第12345部隊) 利根郡内 県立沼田中学校(現県立沼田高等学校)	飯田隊	130名	1945年7月13日～9月12日	校舎3階の4教室		
戦車1師団・戦車1連隊(拓第12071部隊) ほか 群馬郡内 桃井村・前橋陸軍予備士官学校		889名	1945年4月9日～5月末日			
前橋市内 敷島国民学校(現前橋市立敷島小学校)		150名	1945年4月11日～5月中旬 1945年4月16日～5月中旬	講堂	児童に注意	
久留万国民学校					児童に注意	
邑楽郡内 西谷田村国民学校(現板倉町立北小学校)	機動歩兵第1連隊		1945年5月13日～9月10日	校舎の半分	2クラスを1室に	
栃木県佐野市内 天明国民学校(現佐野市立天明小学校) 大伏国民学校(現佐野市立大伏小学校)	戦車第1連隊・連隊本部 戦車第1連隊・第2中隊		1945年6月4日～9月10日 1945年5月中下旬～9月10日以降 同 同 同			
堀米国民学校(現佐野市立城北小学校) 植野国民学校(現佐野市立植野小学校) 佐野国民学校(現佐野市立佐野小学校)	戦車第1連隊・第4中隊 戦車第1連隊・第5中隊 戦車第1連隊・整備中隊					
栃木県安蘇郡内 田沼町田沼第二国民学校(現佐野市立吉水小学校) 田沼町田沼中央国民学校(現佐野市立田沼小学校) 第81師団歩兵第173連隊(納第2878部隊)	戦車第1連隊・第1中隊 戦車第1連隊・第3中隊	4,579名	1945年5月29日～9月12日 1945年5月中下旬～9月10日以降			
高崎市内 県立高崎商業学校(現県立高崎商業高等学校) 前橋市内 県立前橋中学校(現県立前橋高等学校)	野砲兵第81連隊(納第2880部隊)		1944年7月～			
群馬郡内 桃井村国民学校(現榛東村立北小学校)			1944年7月～、青葉部隊も使用 青葉部隊も使用 1945年	裏校舎と講堂 校舎2階		
相馬村国民学校(現榛東村立南小学校) 六郷村国民学校(現高崎市立六郷小学校)		約200名				
碓氷郡内 豊岡村国民学校(現高崎市立豊岡小学校)			1945年4月22日移動、 青葉部隊も使用 1945年5月～、青葉部隊	南平屋校舎、校庭に馬屋 校舎の一部 校舎の一部	二部授業	
八幡村国民学校(現高崎市立八幡小学校)	騎兵1個中隊?乗馬小隊か					
板鼻町国民学校(現安中市立碓東小学校) 坂本町国民学校(現安中市立坂本小学校) 佐波郡内 境町国民学校(伊勢崎市立境小学校) 赤堀村国民学校(現伊勢崎市立赤堀小学校)	野砲隊 1個小隊		1945年4月～ 1944年～ 1945年1月～	4教室	給食中止	
邑楽郡内 伊奈良村国民学校(現板倉町立西小学校) 第214師団歩兵第521連隊(常磐第30858部隊)	1個小隊		1945年6月9日～	中央校舎の教室	9学級が6学級に	
邑楽郡赤羽村国民学校(現館林市立第五小学校) 高射第1師団(晴第4101・1901部隊)ほか 群馬郡新高尾村国民学校(現高崎市立新高尾小学校) 高崎市東国民学校(現高崎市立東小学校) 県立前橋第二工業学校(現県立前橋商業高等学校) 勢多郡宮城村国民学校(現前橋市立宮城小学校) 佐波郡芝根村国民学校(現玉村町立芝根小学校)	高射砲第117連隊 高射砲第117連隊 高射砲第117連隊 高射砲第115連隊照空隊 高射砲第115連隊照空隊	3,449名 70～80名 30名ほど	1945年7月14日～ 1945年7月14日～20日 1945年6月?以前に 納部隊100名くらい 1945年7月中旬 1945年7月中旬	校舎 中校舎2階と講堂 西校舎、校庭南側に半地下壕のような穴に発電機を積んだトラックを入れる	分散授業	水筒が竹筒 陸軍農耕隊も宿泊

部隊と学校	部隊名	人数	移駐時期	校舎・校庭の使用状況	学校側の対応	その他
新田郡太田町九合国民学校（現太田市立九合小学校）	東部第1992部隊	130名	1941年8月末～約1年間	3教室		
航空部隊 山田郡内 大間々農業学校（現県立大間々高等学校）	常陸教導飛行師団		1945年5月～			特攻隊員隔離
大間々高等実科女学校（同上） 新田郡	常陸教導飛行師団		1945年5月～			
笠懸村国民学校（現みどり市笠懸小学校） 藪塚本町国民学校（現太田市立藪塚本町小学校）	常陸教導飛行師団 常陸教導飛行師団	20名	1945年5月～ 1945年4月28日～	1教室と和室 12教室	二部授業と分散授業	
群馬郡内 総社町国民学校（現前橋市立総社小学校）	東部第9906部隊 常陸教導飛行師団		1945年5月5日～ 1945年5月15日～	講堂と数教室	児童に注意、特攻隊員慰安演芸会	
邑楽郡内 中野村国民学校（現邑楽町立中野小学校） 長柄村国民学校（現邑楽町立長柄小学校） 三野谷村国民学校（現館林市立第七小学校） 六郷村国民学校（現館林市立第六小学校）	第64対空無線隊 上小林航空勤務員 第116独立整備隊 特攻隊 燕第14236部隊 帥第19025部隊通信班 帥部隊	196名 105名 100名 38名 124名	1945年5月～ 1945年2月11日～ 1945年6月9日～ 1945年6月18日 1945年7月22日～ 1945年8月4日～ 1945年8月11日～18日	道場 新校舎 収納舎 校舎の一部		
多々良村国民学校（現館林市立第八小学校） 新田郡内 太田町九合国民学校（現太田市立九合小学校）	第169飛行場大隊 航空本部経理部太田工事隊	約500名 約150名 約600名	1944年10月25日～11月10日 1944年10月18日～12月末日	10教室 3教室	二部授業	
陸軍中野学校 北甘楽郡内 県立富岡中学校（現県立富岡高等学校）	学校本部・学生隊本部など		1945年3月下旬～			校庭に兵器の一部を埋める
富岡町富岡国民学校（現富岡市立富岡小学校） 富岡区裁判所 東国敬神道場 井口眼科医院 黒岩村国民学校分教場（現富岡市立黒岩小学校） 沖電気富岡工場工具寮 陸軍予科士官学校 吾妻郡内 草津町国民学校（現草津町立草津小学校） 中之条町国民学校（現中之条町立中之条小学校） 沢田村国民学校（現中之条町立沢田小学校）	下士官学生 学生隊指導部 見習士官学生 医務室 実験隊本部 女子独身寮		945年3月下旬～ 1945年3月下旬～ 1945年3月下旬～ 1945年3月下旬～ 1945年3月下旬～	講堂		
原町国民学校（現東吾妻町立原町小学校）	第60期地上生徒 第61期第2中隊	約200名	1945年7月8日 1945年8月11日～		二部授業	
浅間演習場廠舎	第61期第1中隊	約200名	1945年8月～			機械、器具を埋める
浅間演習場廠舎	第61期第3中隊	約200名	1945年8月～	前校舎と裏校舎の裁縫室と5教室、西校庭に炊事場		
多摩陸軍技術研究所 多野郡内 県立藤岡中学校（現県立藤岡中央高等学校） 第6陸軍技術研究所 利根郡糸之瀬村赤城廠舎 陸軍気象部 利根郡内 県立沼田高等女学校（現沼田女子高等学校）	出張所	50名	1944年～ 1945年～ 1945年～		3年1組動員 2年生動員	校庭に4箇所の穴
県立沼田中学校（現県立沼田高等学校） 海軍第3013設営隊 利根郡古馬牧村南国民学校（現みなかみ町立古馬牧小学校） 第18特設警備工兵隊（東部第13323部隊） 新田郡太田町葦川国民学校（現太田市立葦川小学校）	三上部隊 永井隊 中島飛行機・太田病院	600名	1945年2月5日～ 1945年2月11日～4月7日 1945年2月11日～4月7日 1945年7月12～9月12日 1945年8月3日～	講堂、校庭に事務所、倉庫数棟 雨天体操場、前校舎6教室 裏校舎、西校舎（手術室等） 講堂1、教室2、作法室1、付属設備	分散授業、学級数縮小	
前橋地区特設警備隊（東部第30838部隊） 群馬郡伊香保町国民学校（現渋川市立伊香保小学校） （東部第30848部隊）（線第33969部隊） 碓氷郡臼井町国民学校（現安中市立臼井小学校） 陸軍被服本廠・朝霞作業所 佐波郡東村国民学校（現伊勢崎市立あずま小学校） 碓氷郡松井田町国民学校（現安中市立松井田小学校） 東京第一陸軍造兵廠 勢多郡	防衛召集待命者	約700名	1945年 1944年12月～	4室（東部）、6室（線） 講堂	分散授業	

部隊と学校	部隊名	人数	移駐時期	校舎・校庭の使用状況	学校側の対応	その他
敷島村南国民学校（現渋川市立津久田小学校）	軍人、技術者、工員	80名予定	1945年7月1日～			校庭に埋める
敷島村北国民学校（現渋川市立南雲小学校）		130名予定	1945年7月1日～			校庭に埋める
群馬郡内 長尾村国民学校（現渋川市立長尾小学校）			1945年7月1日～			
白郷井村中郷国民学校（現渋川市立中郷小学校）						
陸軍衛生材料本廠（臣第29751部隊）	軍人、技術者、女工員	30数名	1945年6月22日～	3教室、家事室	4年生、専攻科生徒	校庭に埋める
群馬郡・室田高等実践女学校（現県立榛名高等学校）						
農耕勤務隊						
邑楽郡内						
郷谷村国民学校（現館林市立第三小学校）		約100名	1945年2月19日～5月7日	2教室、宿直室、応接室、物置など		
大島村国民学校（現館林市立第四小学校）	第3農耕勤務隊中村隊	約200名	1945年2月19日～6月15日			
三野谷村国民学校（現館林市立第七小学校）	小柴隊		1945年2月19日～4月30日	4教室		
長柄村国民学校（現邑楽町立長柄小学校）		180名	1945年2月21日～	5教室	5月16日～第18981部隊約150名	
館林町北国民学校（現館林市立第一小学校）			1945年2月22日～	表校舎	児童の手伝い	
西谷田村国民学校（現板倉町立北小学校）			1945年3月14日～		児童の奉仕	
赤羽村国民学校（現館林市立第五小学校）			1945年3月23日～8月10日			
中野村国民学校（現邑楽町立中野小学校）	農兵隊（農耕隊の誤りか）	約650名				朝鮮兵
勢多郡富士見村内	陸軍農耕部隊					
	海軍農耕隊					
群馬郡倉田村内	横須賀海軍航空隊	35名	1945年5月～		二部授業	傷病兵 松根油製造
新田郡強戸村国民学校（現太田市立強戸小学校）						
中島飛行機関係工場						
太田町鳥之郷国民学校（現太田市立鳥之郷小学校）			1945年	講堂、教室	分散授業	
群馬郡小野上村国民学校（現渋川市立小野上小学校）				3教室		
海軍						
多野郡八幡村国民学校（現高崎市立南八幡小学校）	海軍工作兵			2教室		
須賀工場						
県立蚕糸学校（現県立安中総合学園高等学校）			1945年4月1日～8月28日	講堂、加工室、生徒控え室、製糸工場		航空機部品
統計局						
北甘楽郡磐戸村国民学校（現南牧村立南牧小学校）						

を構築している。部隊は新田郡太田町九合国民学校（現太田市立九合小学校）に移駐し、学校の東に陣地が構築されるまでの1年近く、旧校舎3教室を兵舎として接收、使用していた⁴⁹⁾。学校を兵舎として使用した最も早い事例となろう。陣地は太田、小泉、下小林、古戸の4箇所、1944（昭和19）年12月に編成の終わった、独立高射砲第4大隊（晴第1955部隊872名－4個中隊、8センチ高射砲18門、12センチ高射砲6門、電波標定機3基）が防空を担当した。下小林の陣地については、2003年にイオン太田ショッピングセンター建設に伴い太田市教育委員会によって発掘調査が行われている。その結果、6基の砲座が約24メートル間隔で配置され、1基の砲座規模は直径約4.5メートル、低い円柱形のコンクリート製であった。現在、そのうちの1基が移設展示されている（写真2）。なお、海軍の機体生産を行っていた中島飛行機小泉製作所については海軍も担任し、1944年頃に赤岩県道の休泊川近くの低地に4基の砲座を構築している⁵⁰⁾。

高射砲部隊やその関連部隊の足跡は、現在のところ高崎市と群馬郡・勢多郡・佐波郡・新田郡下の国民学校計5校と県立学校1校で確認できる。

○航空部隊の駐屯

筆者は以前に敗戦時の県内駐屯航空部隊を次のようにまとめたことがある⁵¹⁾。

陸軍館林飛行場には第170飛行場大隊（第1航空軍所属、兵員定数372）・第116独立整備隊（航空総軍所属、兵員定数172）、邑楽郡中野村に第64対空無線隊（第1航空軍所属、兵員定数196）。

陸軍新田飛行場には第20戦闘飛行集団飛行第112戦隊（航空総軍所属）もしくは飛行第14戦隊（第1航空軍所属、重爆、兵員定数532）・第165・第166・第169飛行場大隊（いずれも第1航空軍所属、兵員定数各372）・第306独立整備隊（第1航空軍所属、兵員定数172）、新田郡綿内村に第165独立整備隊（第1航空軍所属、兵員定数172）、山田郡大間々町に常陸教導飛行師団第2教導飛行隊。

陸軍前橋飛行場には陸軍航空輸送部第9飛行隊前橋派遣隊の83名。

中島飛行機太田飛行場には航空輸送部第2輸送飛行隊（航空総軍所属）・第101独立整備隊（航空総軍所属、兵員定数172）。

さらに碓氷郡安中町に第123独立整備隊（航空総軍所属、兵員定数172）などである。

ただし、45年7月10日の航空総軍各隊の戦力配置表によると、前橋飛行場には前記第2教導飛行隊の97式戦闘機15機、1式戦闘機9機、2式複座戦闘機3機、操縦者67名が配置されていた。また、館林飛行場には待機特別攻撃隊19隊（4式戦・12隊、キ115・3隊、100

式司偵・4隊)が訓練を行っていた。

そして飛行場(館林・新田・前橋)に近接した町や村の国民学校、県立学校に航空部隊の移駐が認められる。

1945年5月、常陸教導飛行師団が山田郡大間々町に移駐する。師団司令部を町立大間々農業学校(現県立大間々高等学校)や大間々高等実科女学校(現県立大間々高等学校)に置いた。このために、大間々町国民学校(現みどり市立大間々北小と南小学校に分離)では農業学校に東校舎6教室を敗戦まで貸与せざるを得なかった⁵²⁾。さらに軍需物資の貯蔵、保管を主任務とする兵員約20名が笠懸村に分駐し、新田郡笠懸村国民学校(現みどり市立笠懸小学校)の教室一部(東側1教室と西側の和室1)および農家の土蔵を借用していた。そして師団編成の特攻隊隊員は、大間々町ながめ遊園地の宿舎に隔離収容されていた。同所から連日、新田飛行場へ自動車で輸送され訓練を受けていたのである⁵³⁾。

常陸教導飛行師団の移駐は、このほかにも新田郡藪塚本町国民学校(現太田市立藪塚本町小学校)と群馬郡総社町国民学校(現前橋市立総社小学校)でも確認できた。藪塚本町国民学校では4月28日から航空隊の宿舎、5月5日からは東部第9906部隊(飛行第14戦隊―筆者注)に12教室を貸与することになり、二部授業の実施や民家で分散授業をすることになった⁵⁴⁾。また総社町国民学校の「昭和二十年度学校日記」の5月から8月にかけて次の記事がある。5月の記事には「十九時頃講堂ニ宿ル兵隊サン荷物来ル(15日)」、「講堂ニ疎開シタ兵隊サンニ邪間(ママ)魔シナイコトヲ会礼デ訓話シタ(16日)」、「来校者航空隊ヨリ多数(18日)」、「兵隊六十名来リテ一男・女両教室ニ宿泊ス、明朝朝七時出発予定(30日)」、6月になると「兵隊さんの教室借用とそれに伴ふ件について(9日)」、7月は「午後特攻隊勇士慰安演芸会(17日)」、「校庭ニ於テ部隊主催ノ映画会アリ(24日)」、8月は「軍隊に一教室貸与(3日)」、「航空隊機二、腰掛八、学校ヨリ持参ス(10日)」と続いている⁵⁵⁾。『総社町誌』では師団名の「常陸」を「日立」と誤植しているが、5月26日に講堂と旧校舎数室を航空隊の兵舎に提供、本部、病室等が設けられ、堤ヶ岡(陸軍前橋飛行場)を基地とする特攻隊員の訓練が行われた、と記している⁵⁶⁾。なお、常陸教導飛行師団は7月に入り廃止、教導飛行師団第2教導飛行隊となり、それを基幹として第112戦隊が編成されている。

次に陸軍館林飛行場関係について見てみよう。1945年5月、飛行場の北西約3キロメートルの邑楽郡中野村国民学校(現邑楽町立中野小学校)は飛行隊所属通信隊員の宿舎となった⁵⁷⁾。これは第64対空無線隊(燕第19551部隊)を指している。6月9日、飛行場の南約1.4キロメートルの三野谷村国民学校(現館林市立第七小学校)に「飛行機整備兵二〇〇名到着約一〇〇名本日

ヨリ学校ニ駐屯」⁵⁸⁾した。これは第116独立整備隊と思われる。同じく東約2.3キロメートルの六郷村国民学校(現館林市立第六小学校)には6月から8月にかけて、その「沿革史」に次の記載が認められる。「特別攻撃隊勇士三十八名道場ニ宿泊ス(6月18日)、燕一四二三四部隊長鈴木大尉以下一二四名新校舎ニ宿泊駐屯ス(7月22日)、帥一九〇二五部隊酒井隊通信班収納舎ニ宿泊ス(8月4日)」⁵⁹⁾。ただし燕の正確な通称番号は14236で第158野戦飛行場設定隊に、帥19025部隊は第30戦闘飛行集団司令部になる。そして敗戦4日前の8月11日に至っても、北東2.4キロメートルの多々良村国民学校(現館林市立第八小学校)に「帥飛行部隊本校舎一部ヲ充用本日ヨリ駐留」、18日になって「帥飛行部隊ノ将兵本日ヲ以テ当地ノ任務完了本部隊ニ復帰ス」⁶⁰⁾となっている。飛行場の東西南北に近接して位置する国民学校4校にその足跡が残されていることがわかる。

陸軍新田飛行場関連では、新田郡太田町九合国民学校で部隊の足跡を確認できる。1944年10月25日から11月10日まで10教室を第169飛行場大隊(燕第18941部隊)約500名が使用、同じく10月18日から12末日まで陸軍航空本部経理部太田工事隊約150名が3教室を宿舎として使用している。このために二部授業となった⁶¹⁾。

なお、邑楽郡長柄村国民学校(現邑楽町立長柄小学校)には、1945年2月11日、前日の中島飛行機太田製作所の空襲により宿舎を失った上小林航空勤務員105名が講堂に宿泊している⁶²⁾。

館林・新田・前橋の各飛行場にあっては、特攻隊の訓練が日常的に行われ、隊員は隔離された宿舎に、あるいは国民学校に宿泊していたことが判明した。

(エ) 軍後方部隊、病院、学校、研究所など(図3)

○陸軍中野学校(東部第33部隊)の移転

東京の中野にあった陸軍中野学校は、軍における情報勤務に従事する幹部の養成、戦争末期においては遊撃戦闘のための幹部養成を行った学校であり、その存在は極秘であった。

米軍の日本本土空襲激化にともない、日常の教育訓練に支障をきたしたと、さらに松代大本営構想との関係で、北甘楽郡富岡町(現富岡市)に移転が行われたのは、45年3月下旬から4月中のことである。県立富岡中学校(現県立富岡高等学校)に学校本部、学生隊本部、見習士官学生、将校学生、勤務隊の一部(無電班)、炊事班が移転、しかし富岡中だけでは収容しきれなかったために、学生隊指導部を富岡区裁判所、下士官学生を富岡国民学校(現富岡市立富岡小学校)講堂、見習士官学生を東国敬神道場、医務室を井口眼科医院、実験隊本部を北甘楽郡黒岩村国民学校分教場(現富岡市立黒岩小学校)、そして女子独身寮を沖電気富岡工場工員寮に分散

させた。富岡町を中心に西は北甘楽郡吉田村から東は多野郡吉井町に至る、上信電鉄沿線の各町村に職員および将校学生約600名が分宿したのである⁶³⁾。富岡国民学校の講堂には、日夜将校が出入し、執務していた⁶⁴⁾。

陸軍中野学校は本土決戦に伴い、秘密戦部隊が指導する秘密戦・謀略戦を関東平野で展開しようとするのが任務であった。その一つに「泉部隊」の存在がある。完全に地下に潜り、身分、行動を秘匿し、個人または少数者が泉のようにわき出て遊撃戦を行う。さらに4月には、中野学校出身者を中心に「関八州部隊」も新設された。関東平野が米軍に占領され、大本営は長野県松代に移転し、作戦軍が関東北西部の山岳丘陵地帯に撤退を余儀なくされた時、米軍占領下の関東平野に残留する日本国民を組織して、米軍に対して後方攪乱、武装蜂起、遊撃戦等を行うというものである⁶⁵⁾。また、前橋地区司令部にも、中野出身者が司令部及び特設警備隊に配属され、主として特警隊員の遊撃戦指導と訓練に当たっていた。軍の内部においてさえ、一部の関係者を除いてその存在はまったく知られていなかったことから、8月11日には早くも解散準備が命令されている。13日夕から重要書類・秘密兵器・通信機材の焼却破棄が開始された。兵器の一部は校庭に埋められたが、前橋に進駐した米軍政部による中野学校に対する追求調査は激しく、隠匿兵器の摘発、関係者の召還などが行われた。これらの処置は独立工兵第27連隊に対する処置と同様であった。

なお、県立富岡高等学校の敷地内には、「楠公社」（昭和16年6月）碑とその副碑「楠公社社号標銘」（昭和53年3月）（写真3）、「陸軍中野学校終焉之地」の碑が建立されている（写真4）。

また、今後検討しなければならない事例に北甘楽郡磐戸村国民学校（現南牧村立南牧小学校）に統計局の一部疎開が行われていることである⁶⁶⁾。松代大本営構想にかかわるものと考えられるが、現時点では詳細不明である。



写真3 「楠公社」碑と副碑「楠公社社号標銘」



写真4 「陸軍中野学校終焉之地」碑

○陸軍予科士官学校の疎開

陸軍予科士官学校に在校した生徒は、陸軍幼年学校の卒業生、満16歳から19歳までの採用試験合格者や同じく試験に合格した下士官などである。

疎開を目的として長期野営演習が実施されたのは、1945年5月20日から7月22日、そして8月7日からの二度である⁶⁷⁾。最初の疎開は群馬県新鹿沢に生徒隊第27中隊から第32中隊（第60期地上生徒）、埼玉県寄居地区に第21中隊から第26中隊（第61期甲生徒）であった。予科士官学校の疎開を『中之条町誌第二巻』では、中之条に疎開した当時の区隊長後藤健二大尉の記述によって、敗戦の年の5月頃としている⁶⁸⁾が、他の資料で確認すると、吾妻郡草津町国民学校（現草津町立草津小学校）に7月8日宿泊している⁶⁹⁾ことなどから考えると、一度目は浅間演習場の廠舎に疎開したものであろう。この第60期地上生徒隊1,741名は7月29日の卒業式出席のために7月22日帰校している。

その後、中之条町国民学校（現中之条町立中之条小学校）では7月27日に臨時学務委員会が開かれ、士官学校の疎開対策を協議（二部授業の実施など）している。そして8月11日に予科士官学校富士隊が疎開している⁷⁰⁾ことから、この疎開は8月7日に開始された、第61期（地上）生徒第1中隊から第3中隊の長期野営演習のために中之条への疎開であったことがわかる。8日には生徒隊第4中隊から第6中隊が浅間廠舎に疎開している。

沢田村国民学校（現中之条町立沢田小学校）には第1中隊、中之条町国民学校には第2中隊が疎開、両校とも中隊長以下各200名位、計約400名であったという。近くの桑畑などを借用して待避壕の構築、沢田村国民学校には東久邇宮俊彦王が一生徒として在籍していた。敗戦後、持参してきた機械、器具などの諸教育用品や書類は焼却したり、穴を掘って埋めている⁷¹⁾。さらに原町国民学校（現東吾妻町立原町小学校）には第3中隊が疎開、西校庭に炊事場が設けられ、前校舎西端の教室を物資納

入の倉庫、裏校舎二階東端の裁縫室は中央を仕切って教室と事務室、食堂は裏校舎階下の廊下、裏校舎階下の5教室を士官学校生徒の教室にあてている⁷²⁾。

このように陸軍予科士官学校の疎開は二度にわたっている。そして吾妻郡下の国民学校4校でその足跡を確認することができた。この疎開は陸軍中野学校の移転と同様に、松代大本営構想との関係から考えられた可能性がありそうである。

○多摩陸軍技術研究所の疎開

1943（昭和18）年6月、第5・第7・第9の各陸軍技術研究所と第4陸軍航空技術研究所の電波兵器研究部門が統合され、多摩陸軍技術研究所が新設された。1944年頃になると各地に多数の出張所が疎開分散している。これらのうちのひとつに、県立藤岡中学校（現県立藤岡中央高等学校）に疎開した研究部第2科（藤岡出張所）があった⁷³⁾。電波兵器の研究（機上用探索、妨害機などの研究）をおこなっていたが、研究開発は逐次停頓し敗戦と共に解散している⁷⁴⁾。

○第6陸軍技術研究所の疎開

1940（昭和15）年4月、内地における唯一の化学戦部隊として迫撃第1連隊が創設された。そして太平洋戦争開戦直前の12月、迫撃第1連隊は沼田に移駐してきたが、前後して附属沼田陸軍病院の発足、赤城廠舎建設と特殊演習場の新設が1941年から42年初頭にかけて実施されている。また気象観測所が赤城廠舎の西側に設置され、ガス気象などの観測を行った。沼田陸軍病院は、同部隊、沼田憲兵分遣隊、赤城演習場および廠舎、赤城気象観測所の軍人軍属の患者を収容治療を任務とした病院である。さらに衛生部員の教育を行い衛生材料を保管しこれを各部隊に供給、衛生試験を行うことも任務としていた。

敗戦の年には毒ガスの研究機関である、第6陸軍技術研究所の一部（人員50、任務・実験材料の管理）が赤城廠舎に移転している⁷⁵⁾。1985年発行の『沼田陸軍病院記念誌』には次のような証言が掲載されている。戦時中の動員計画によって「沢山の衛生材料が倉庫に常時整備され、とりわけ隣接の迫撃特殊部隊に関するものが多く、この保全、手入れは加藤薬剤官の担当で、同氏の苦心も偲ばれます」⁷⁶⁾。衛生材料とは毒ガスにかかわるものであろう。

○陸軍気象部第1軍気象隊の移駐

利根郡糸之瀬村（現利根郡昭和村）にあった赤城気象観測所は、すでに記したように毒ガス戦を想定したガス気象や関東・東北区域の気象業務を担当していた。この作業の一部が、県立沼田高等女学校（現県立沼田女子高等学校）と県立沼田中学校（現県立沼田高等学校）の教室で開始されたのは、1945年5月28日からであった。

沼田高女に陸軍の見習士官が気象学の講話に来たの

は、5月21日が最初である。そして同月28日午前9時から3年生の陸軍気象部入部式があった。学校長以下全職員生徒が参列し、陸軍側からは山岡大佐が出席した。作業の内容は、「他から送られてくる気象観測データー（風向、風速、雲量、晴雨その他）を、資料用紙に数字で表していくもので、国内ばかりでなくアジア各地域の記録をも処理した。（中略）ほぼ毎日資料整理を続けて」⁷⁷⁾、8月17日、校庭に2メートル四方の四角い穴を4箇所掘り山のような大量の紙を焼却処分している。

沼田中も5月28日から教室が使用されている。赤城気象観測所で上げた気球等から観測データーをとり、そのデータ伝票を整理転記する仕事を3階地歴教室でやっていた⁷⁸⁾。この作業には2年生が1学級ずつ動員されている。

○海軍第3013設営隊の移駐

1945年2月5日、利根郡古馬牧村役場に、海軍第3013設営隊の隊長三上善蔵技術大尉以下兵600名、トラック、ブルドーザー、ローラー車等20数車輛の編成を以て、移駐する旨の公報が入った。これと共にその先遣隊が到着、古馬牧村南国民学校（現みなかみ町立古馬牧小学校）に本部を設け、校庭に事務所、倉庫など数棟の建物を建築した。10日には兵員も揃い、下士官以下の兵隊は講堂を間仕切りして起居、下士官以上は農家に分宿した⁷⁹⁾。中島飛行機小泉製作所尾島工場の地下工場を間組と建設するためであった。不動沢の南側（飛行機製作工場）を間組、北側（電気関係工場）を三上部隊が担当した。

この地下工事には、岩本水力発電所工事に強制連行された中国人563名、朝鮮人勤労報国隊1,500名の他、中島飛行機小泉製作所尾島工場の工員約800名、郡内各村の青少年約150名による勤労報国隊が動員されている。

地下工場は、隧道が約1万4,900平方メートル、半地下が約1万平方メートルという構造の機体生産工場で、8月10日に完成をみたものの、使用されることはなく敗戦を迎えた。

○中島飛行機太田病院と第18特設警備工兵隊（東部第13323部隊）の疎開

1945年2月10日、米軍の中島飛行機太田製作所に対する空襲は、同製作所に甚大な被害を与えた。このために同製作所の太田病院は、翌日、負傷者収容のために近接する太田町葦川国民学校（現太田市立葦川小学校）に疎開した。裏校舎を使用し調理室は同病院の炊事室に、西校舎は手術室、薬品、医療用具、寝具置場となった。さらに東部第13323部隊（永井隊）の宿舎として、雨天体操場と前校舎の玄関西6教室が貸与されることになった。このため学校側は寺院などで分散授業を行い、3月1日になって学級数を縮小して軍隊と共用することで学校において授業を再開している。この措置は4月7日

に太田病院が藪塚伏島館へ、第13323部隊が小林療へ移動するまで続いた⁸⁰⁾。

○宇都宮師管区部隊（東部第30838・30834・30848部隊）の駐屯

宇都宮師管区部隊の配当通称番号第30801部隊から第31000部隊のうち、県内では次の部隊を確認することができた。

群馬郡伊香保町国民学校（現渋川市立伊香保小学校）の講堂1棟、西側普通教室2、作法室1、及び学童の使用しない付属設備が、防衛招集待命者集合教育のため東部第30838部隊（部隊長 小山房吉）に貸与されている⁸¹⁾。貸借期間は1945年8月3日から同年9月28日までとなっていたが、敗戦により僅かな期間の駐屯となった。同校には、軍のポスターカラー、製図用具等相当量の遺留品が残されて戦後の物不足を補ってくれたという⁸²⁾。また、東部第30834部隊長から古馬牧村長への通牒、「警発第五十一号 対空施設実施方依頼ノ件通牒 昭和二十年七月十七日」⁸³⁾、さらに碓氷郡白井町国民学校（現安中市立白井小学校）では東部第30848部隊に4室、第19独立鉄道作業隊（線33969部隊）に6室提供している⁸⁴⁾。

これらの部隊の詳細は不明であるが、前橋地区第1～第18特設警備隊のいずれかに該当するものと思われる。

○東京陸軍被服本廠・朝霞作業所（東京陸軍被服支廠）の疎開

群馬郡室田町（現高崎市室田町）の湯殿山隧道に、朝霞作業所の製靴工場が疎開してきたのは1943年10月のことである、と『室田町誌』は記す⁸⁵⁾が、この疎開年月日には疑問点が残る。

というのも、佐波郡赤堀村と東村の桜塚、女堀地区の数十町歩にわたる松林の中に、陸軍被服本廠の一部、朝霞作業所のそれも一部が疎開して来たのは1944年12月のことであるからである。人員は67名の軍人と工員技術者等で約700名に及んだ。この国定作業所の縫製裁断工場では夏衣袴、製靴工場内では編上靴、航空手袋、航空頭巾、装工場では航空手袋、航空頭巾が生産されていた。翌年には榛名山麓の室田に向かって製靴班全部が移動している。残った被服廠では航空用被服、軍手等の製造を行っていた。このため佐波郡東村国民学校（現伊勢崎市立あずま小学校）を宿舎としたことから、5月31日から児童分散授業が始まり、1年生は下集会所、2年生は竹沢方次郎方、4年生は三室集会所を仮校舎とせざるを得なかった⁸⁶⁾。また倉庫として垂鉛坑の坑道を利用した安中支庫（安中市安中・中宿）⁸⁷⁾、碓氷郡松井田町国民学校（現安中市立松井田小学校）の講堂にも被服廠の物資が保管された。そして学校の裏山の横腹に多量の物資を集積するための横穴の地下壕が掘り続けられていた⁸⁸⁾。

○東京第一陸軍造兵廠の疎開

利根川を挟んだ勢多郡敷島村（現渋川市）と群馬郡長尾村・白郷井村（現渋川市）に板橋の東京第一陸軍造兵廠が疎開している。

敷島村と造兵廠との間の貸借契約書によると使用開始は1945年7月1日から、鉄筋コンクリート2階建の南国民学校（現渋川市立津久田小学校）に工場長で陸軍技術少佐の桜井稔以下80名、木造2階建の北国民学校（現渋川市立南雲小学校）には陸軍技術少尉・安吉信治以下130名の計210名の予定であった。実際は、南国民学校へは相当数の兵員が来たが、北国民学校は疎開準備中に敗戦となり、部隊は入らずある程度の工員が一般民家を借り受けて宿泊所としただけであった。敗戦後、武器や保管物資は校庭の一部を掘って埋めたり焼却処分しているが、後にまた掘り出したという⁸⁹⁾。

群馬郡下の長尾村国民学校（現渋川市立長尾小学校）、白郷井村では中郷国民学校（現渋川市立中郷小学校）⁹⁰⁾の疎開状況は不明であるが、国民学校4校でその足跡を確認できる。

○陸軍衛生材料本廠（臣第29751部隊）の疎開

陸軍衛生材料本廠作業場として群馬郡室田町立室田高等実践女学校（現県立榛名高等学校）の校舎使用契約が結ばれたのは、1945年4月12日のことである。6月22日から校舎で工場施設の事業が着手され、そして8月1日から3教室と家事室で陸軍大尉以下技術者、女子工員等30数名が、カンフル注射薬製造を行った。この作業には4年生と専攻科の生徒が動員されている。ここでも敗戦後、製造した注射薬を軽子に入れて校庭に埋めている⁹¹⁾。

（オ）その他（図3）

○農耕勤務隊の移駐

陸軍では1945年1月30日に第1～第5農耕勤務隊が編成された。このうち第1～第3は、東部軍（東部軍管区）編成である⁹²⁾。『群馬県復興援護史』には第2農耕勤務隊の記載があったが、農耕勤務隊の宿泊が認められたのは邑楽郡下1町6村の国民学校である。それは、1945年2月19日から郷谷村国民学校（現館林市立第三小学校）、大島村国民学校（現館林市立第四小学校）、三野谷村国民学校（現館林市立第七小学校）に、同月21日には長柄村国民学校（現邑楽町立長柄小学校）、22日には館林町北国民学校（現館林市立第一小学校）である。3月になると14日に西谷田村国民学校（現板倉町立北小学校）、23日には赤羽村国民学校（現館林市立第五小学校）の「沿革史」に農耕隊の記載が見られる。次に個別に見てゆきたい。

郷谷村国民学校⁹³⁾には、約100名が2月19日の午後10時30頃到着している。小隊長は関根茂良少尉、翌日

農耕隊員を児童に紹介した。宿舎は裁縫室と階下の2教室、炊事室は宿直室東の物置、隊長室は宿直室、下士官室は応接室、倉庫・物置・浴場などは農具舎が割り当てられた。5月7日になって農耕隊員の出発が記録されている。大島村国民学校⁹⁴⁾には、第3農耕勤務隊の中村隊約200名が校舎を宿舎として農耕作業を行った。そして6月15日になって栃木県那須に移動している。三野谷村国民学校⁹⁵⁾では農耕隊（小柴部隊）が4教室に駐屯、そして4月30日に新任地に向けて出発している。長柄村国民学校⁹⁶⁾には180名宿泊している。ここには5月16日になると第116独立整備隊（帥第18981部隊）の約150名が宿泊、裁縫室以東5教室を貸与することになった。館林町北国民学校⁹⁷⁾ ⁹⁸⁾では表校舎を貸与している。西谷田村国民学校⁹⁹⁾には3月14日から駐屯、5月15日には児童が農耕隊の馬鈴薯手入れの手伝いを行っている。赤羽村国民学校¹⁰⁰⁾では、3月23日に5年生以上の児童が農耕隊の馬鈴薯植付作業に奉仕、さらに5月15日・16日・28日、6月6日・7日にも農耕隊に奉仕の記載が認められる。そして8月10日農兵隊帰農につき校舎清掃9時解散となっている。中野村国民学校（現邑楽町立中野小学校）校舎の一部も農兵隊（農耕隊の誤りかー筆者注）が宿舎¹⁰¹⁾としていた。

1校につき100名から200名の規模、期間は2ヶ月半から5ヶ月ほどである。邑楽郡下には第3農耕勤務隊が分散移駐し、食糧生産に携わっていたものであろうが実態はよくわからない。なお、第2農耕勤務隊の移駐を確認することはできなかった。『群馬県復員援護史』の誤りであろうか、第2農耕勤務隊は第3農耕勤務隊の可能性がありそうである。

また1944年に東部第38部隊（高崎）の兵士約50名が群馬郡倉田村（現高崎市倉渕町）の三ノ倉蘭津で山地を開墾し食糧の増産にあたり、さらに翌年5月横須賀海軍航空隊燃料班の兵士35名（傷病兵）が高芝の地で木炭生産を開始¹⁰²⁾した頃、陸軍前橋飛行場には東部第38部隊から農耕隊1個小隊が転属してきた¹⁰³⁾。勢多郡富士見村では朝鮮兵で組織された陸軍農耕部隊が石井一区の民家に、茨城より移駐した海軍農耕隊が石井三区会館に、その数合わせて約650名が天神平を開墾して農耕増産に当たっていた¹⁰⁴⁾。これらの記述から農耕勤務隊は陸海軍で組織されていること、さらに朝鮮人や傷病兵がその任にあたっていたこと、などがわかる。食糧に逼迫した、断末魔の軍の姿が垣間見える。

なお、これとは別に1943年12月に閣議決定された農兵隊という組織もあった。これは農家の長男で農業要員となるべきものが対象とされて食糧増産に携わった組織で、翌年には群馬農兵隊が知事の任命のもとに編成されている。名称は「群馬大隊」、そして各都市に中隊がおかれた¹⁰⁵⁾。

食糧増産だけではない。航空用ガソリンの代用としての松根油製造が県内各地で行われた。新田郡強戸村には多くの兵士がやってきて、神社やお寺、そして強戸村国民学校（現太田市立強戸小学校）に宿泊したために、授業は午前、午後の二部制になった¹⁰⁶⁾。勢多郡敷島村にも海軍の兵隊が上越線敷島駅の北方に大釜を備え付けて村民に無料で供出させた松根から製造¹⁰⁷⁾、室田町でも海軍建設隊兵士の管理指導下に製造、などの記述も確認できる。現甘楽郡南牧村でも作業隊が駐留していた¹⁰⁸⁾。

このほかに太田町鳥之郷国民学校（現太田市立鳥之郷小学校）では講堂兼教室校舎が中島飛行機の工場となったのは1945年、7月から各大字のお寺や集会所で分散授業が行われた¹⁰⁹⁾。同じく中島飛行機の下請け工場の疎開が群馬郡小野上村国民学校（現渋川市立小野上小学校）の東校舎3教室に¹¹⁰⁾、多野郡八幡村国民学校（現高崎市立南八幡小学校）の2教室が海軍工作兵の宿舎となっている¹¹¹⁾。県立蚕糸学校（現県立安中総合学園高等学校）の講堂、加工室、生徒控え室、製糸工場は、航空機部品を製作する須賀工場が使用していた¹¹²⁾ というように、実に様々な軍関係工場が県立学校や国民学校に疎開しているのである。

4. 本土決戦に関わる遺跡を考える

1944年7月以降、県下全域に様々な部隊の移駐を確認することができた（図1～3）。それらは作戦軍の移駐と防空部隊や後方部隊の配置、軍施設の疎開、さらには食糧増産の部隊など多岐にわたった。このために国民学校を主体に県立学校の校舎までも兵舎や工場の一部とせざるを得なく、その足跡は数多くの学校に残されていた（表1）。

部隊移駐に伴い校舎の使用だけではなくて、校庭には炊事場、浴場、厩、訓練用のタコツボ、そして自活用の甘藷が栽培され、周辺には人馬用の防空壕、三角兵舎や洞窟兵舎が構築されている。これらについては『研究紀要』29でその概要を報告してあるが、再度確認しよう。たとえば炊事場と浴場についてみると、その構築基準は次のようになっていた。炊事場の大きさは概ね200～300名を1単位として構築され、長さ21メートル、幅5.5メートルを必要とした。釜湯調理所30平方メートル、主食釜数3個、米麦塩蔬菜庫20平方メートルなどである。180名に対する浴場は長さ10.5メートル、幅5.5メートル、浴槽は3.6平方メートルである。いずれも1個中隊を単位として構築されたものであろうが、複数部隊の混在した学校もあり輻輳とした状況であったと思われる。校舎内には武器や弾薬、軍事物資の保管もあり、学校側は学級数を減らしたり、二部授業や分散授業などの対応をせざるを得なかった。

そして敗戦時、さまざまな武器や弾薬類の破壊と書類

の焼却が行われた。その残骸を埋没させるために穴が掘られたが、その多くは部隊が駐屯していた学校の校庭で実施されている。独立工兵第27連隊、陸軍中野学校や陸軍予科士官学校、陸軍気象部、東京第一陸軍造兵廠や陸軍衛生材料本廠の事例のように、兵器や器材の一部、保管物資などが校庭などに埋められた。また秘密兵器の一部は利根川への投棄も行われている。その後、その多くは米軍の命令によって回収されていったが、とりわけ陸軍中野学校と独立工兵第27連隊については米軍の厳しい目が向けられていた。

このようなことから、県内での本土決戦に関わる遺跡、その遺構として検出されるものには次のものが考えられる。部隊の炊事場や風呂場跡、厩の跡、廃棄土坑、防空壕やタコツボ、そして大規模な地下工場跡である。

廃棄土坑の中には、たとえば校庭に戦車を二台も三台も埋めた、との証言から相当大規模な掘削が行われたものもありそうである。これらはいずれも後に再発掘されているが、遺構として十分に確認することができるであろう。校舎の建て替えに伴う発掘調査ではこうした遺構に注意する必要がある。防空部隊にかかわる遺構については、陸軍前橋飛行場跡周辺から高射機関銃座の発掘、太田市の下小林では高射砲陣地跡の発掘が実施されている。

さらに遺物として検出されるものは次のものが考えられる。焼却文書、武器・弾薬類、毒ガス溶剤などである。焼却文書はこれまでも幾つかの遺跡から発見されている。武器・弾薬類についても陸軍特殊演習場跡などから発見されている。この場所には第6陸軍技術研究所や沼田陸軍病院保管の毒ガス溶剤が秘密裏に遺棄された可能性を指摘できる。となれば、今日まで残存しているものと思われる。

戦後、部隊の移駐を記した記念碑が、県立富岡高等学校内と前橋市富士見町の忠霊塔に建立されている。

おわりに

本土決戦下の群馬県における部隊の展開と配置を再確認しよう。まずこれに先立って軍隊が学校に駐屯した最も早い事例に太田町九合国民学校がある。それは太平洋戦争開戦直前の1941年8月のことであった。

本土決戦に伴う本格的な移駐は1944年7月からの歩兵第173連隊（納部隊）に始まる。県立学校2校、国民学校10校でその足跡を確認できた。45年になると、4月から5月にかけて満州からの転用部隊である、戦車第1師団（拓部隊）と独立工兵第27連隊（幡部隊）が展開、そして青葉兵団2万3,144名の本格的移駐へと続いた。この間においても部隊の移動は激しく、納部隊の移動後、青葉兵団が入替わるなどの事態が生じていた。また、複数の部隊が同居した学校もあった。これらの部

隊は、県下の国民学校82校、県立学校5校、郡立学校1校に移駐していることが判明した。

さらに高射砲部隊の移駐が国民学校5校と県立学校1校他、陸軍の飛行場に関係した部隊の配置が国民学校9校と町立学校2校で確認できた。これらは45年5月から7月にかけての移駐が多かった。さらに陸軍の3飛行場では特別攻撃隊の訓練が恒常的に行われている。

陸軍中野学校（国民学校2校・県立学校1校他）と陸軍予科士官学校（国民学校4校他）の移転や疎開は、松代大本営構想と切り離して考えることはできない。群馬から長野へ向かうルートとの2つに、遊撃戦を展開させるための陸軍中野学校を移転させ、正規将校の養成機関である予科士官学校を疎開させているのは、あくまでも松代大本営を死守するための構想の一環と考えることができよう。

さらに様々な軍研究所や施設、軍関係工場の疎開もあった。とりわけ第6陸軍技術研究所の疎開は注意を要する。それらは県立学校4校、町立学校1校、国民学校15校に及んでいる。さらに食糧増産の部隊である、陸軍農耕勤務隊の足跡は45年2月から邑楽郡下の国民学校8校に残されていた。

県は1945年3月27日に「国民学校教育緊急措置ニ関スル件」を通牒し、分散授業計画の提出を求めた。これは疎開者の収容宿舎、軍隊の移駐或いは工場の疎開場所として校舎を使用するため、さらには空襲による危険を避ける目的などからであった。そして4月からは国民学校初等科（1年生から6年生まで）を除き、むこう1年間、すべての学業は停止となり、生徒は学校工場、軍需工場、軍用施設などへと動員されていった。

結果として、軍の足跡は県下国民学校121（重複校は1校として）校、県立学校10校、郡立学校1校、町立学校3校にも及んだ。何事にも軍が最優先した時代であったから、関係市町村長は校舎の貸与に関してこれを拒むことはできなかった。学校現場は二部授業や分散授業で対応せざるを得なかった。県立学校の使用については、1945年6月23日付の県内政部長から市長・地方事務所長・中学校長へ宛てた文書「校舎使用料支払いに関する件」によると、東部軍管区経理部長と協定ができたこと、それによれば基準として常統使用の場合は堅牢建築の中等学校では1坪1月4円または一時的あるいは非常時使用に関しては無償を原則とすることが示された¹¹³⁾。軍のすることに異論を挟む余地はなかった。

なお、調査の過程で、敗戦直後に児童の死亡事故が多発していることもわかった。それは8月17日、館林町北国民学校の12名が飛行学校に遊びに行き爆弾を拾い持っているうち破裂、1名死亡6名負傷¹¹⁴⁾、富士見村原国民学校でも同日、校庭で不発弾が爆発して死者2名、負傷者数十名に及んだ。「学校は夏休み中でしたが、十

七日が登校日になっており（中略）校庭いっぱい生徒が遊んでいました。（中略）突然「ドッカーン」と物凄い音と共に「キャー」と悲鳴が聞こえ何事かと窓から外を見ると、生徒達はくもの子を散らすように校庭の隅に逃げ、二三十人の子が「イタイ、イタイ」ところげ廻っており、倒れて動かない子もいました。（中略）B29が落としていった危険物が集めてあり、その中の不発弾が爆発したのです¹¹⁵⁾。さらに9月28日、焼夷弾のあきがらを採集に行った吾妻郡高山村国民学校の高等科2年生1名死亡、2名重傷である¹¹⁶⁾。戦争は終わってもなお悲劇は続いた。

戦争を遂行してゆくために、銃後においては平時とちがってさまざまな非日常的な生活が要求された。そして1944年6月からのB-29による本格的な本土空襲後、前線と銃後の区別は全くなり、それに歩調を合わせるかのような本土決戦体制、個人の体験として個別化されていた、この時期のさまざまな戦時下の体験は、まさに戦場体験にほかならないといえるだろう。

なお、本稿は平成23年度自主研究「史料と遺跡から見た群馬県内の本土決戦状況」の成果の一部である。

注

- 1) 兵要地誌は戦略・作戦と結びついた、事前の準備・用意の役目を果たす応用地理学。軍事作戦を現地で遂行するために必要な予備知識。源 昌久 2000 「わが国兵要地誌に関する一研究」『空間・社会・地理思想』第5号、p37-61による。
- 2) 群馬県県民生活部世話課 1974 『群馬県復員援護史』p2-4、p937-939
- 3) 「第三十六軍関係資料」（文庫柚162）、「通称号に関する綴」（中央軍事行政編制339）、「陸軍部隊調査表（其一～其四）」（中央軍事行政編制335）以上、防衛研究所所蔵。この他に防衛庁防衛研修所戦史室1971 『戦史叢書 本土決戦準備〈1〉—関東の防衛—』「付表第一 終戦時における第一総軍隷下部隊一覧表」「付表第二 終戦時における東北 東部 東海軍管区部隊一覧表」を参考とした。
- 4) 陸軍習志野学校史編纂委員会 1987 『陸軍習志野学校』
- 5) 「航空部隊一覧表 説明資料」（陸空中央編制用法25）防衛研究所所蔵
- 6) 「留航資第二十号 航空部隊配置要図 昭和22年7月21日」（航空中央編制用法8）、防衛研究所所蔵
- 7) 群馬県史編さん委員会 1991 『群馬県史 通史編7 近代現代1』p724-726
- 8) 森田秀策氏のご教示による。
- 9) 群馬県立境高等学校創立100周年記念事業実行委員会 2004 『境高百年史』p57
- 10) 創立50周年記念誌編集委員会 1973 『佐波農五十年』p246
- 11) 部隊史全般編纂委員 1985 『独立工兵第二十七連隊』
- 12) 時澤小学校創立130周年記念誌編集委員会 2003 『時澤小学校130周年記念誌』p96
- 13) 富士見村立原小学校 1974 『原小学校「いまむかし」創立百周年記念誌』p37、p45
- 14) 時沢小学校百二十年誌編集委員会 1994 『時沢小学校百二十年誌』p132
- 15) 富士見村誌編纂委員会 1954 『富士見村誌』p538
- 16) 前橋市久留万国民学校「昭和二十年度当宿直日誌」前橋市教育研究所所蔵
- 17) 「第十二方面郡作命丙綴其一」（本土東部117）防衛研究所所蔵
- 18) 沼田高等学校 1997 『沼高百年史 上巻』p162-163

- 19) 「人員掌握一覧表 拓第12081部隊長」（本土東部274）防衛研究所所蔵
- 20) 長谷川正人 2011 『女優森光子』、また群馬県立女子大学群馬学センターの熊倉浩靖教授のご教示にもよる。
- 21) 早乙女務 2006 『あの夏の日司馬遼太郎』、田沼 清 2003 『国民学校の軌跡』を参照。
- 22) 敷島国民学校「昭和二十年度日直簿」前橋市教育研究所所蔵
- 23) 前橋市教育史編さん委員会 1986 『前橋市教育史 上巻』p1237
- 24) 板倉町立北小学校記念誌編集委員会 1994 『桜が丘今昔—板倉北小学校 百二十年誌—』p66、p70
- 25) 前橋市久留万国民学校「昭和二十年度当宿直日誌」前橋市教育研究所所蔵
- 26) 防衛庁防衛研修所戦史室 1971 『戦史叢書 本土決戦準備〈1〉—関東の防衛—』「付表第三 第1総軍主要部隊編制概要」
- 27) 桃井小学校開校百周年記念事業実行委員会 1976 『桃井小学校百年史』p159
- 28) 多胡四郎 1993 「我が半生の記」『しらかば 高崎商業学校卒五十年記念誌』p78-79、当時の高崎商業学校所在地は現在高崎警察署や合同庁舎となっている。県立学校では移転や統廃合の結果、当時と異なる所在地となってい場合もあるが、学校の継続性を考えて現在の校名を記した。県立前橋中学校、同藤岡中学校なども同様である。この点については、齋藤利昭氏のご教示による。
- 29) 岩島村誌編集委員会 1971 『岩島村誌』p1069-1070
- 30) 中坪 弘 1993 「軍隊生活の五ヶ月間」『しらかば 高崎商業学校卒五十年記念誌』p160-162
- 31) 「豊岡誌」編さん委員会 2007 『群馬県高崎市『豊岡誌』』p96
- 32) 高崎市立八幡小学校校史発行委員会 1977 『高崎市立八幡小学校のあゆみ』p95-97
- 33) 前橋高等学校校史編纂委員会 1983 『前橋高校百三年史 下巻』p1179
- 34) 板倉町史編さん委員会 1985 『板倉町史 通史 下巻』p548
- 35) 安中市市史刊行委員会 2002 『安中市史 第六巻 近代現代資料編1 別冊付録 人々の暮らし』p127
- 36) 「百年のあゆみ」編集委員会 1977 『六郷小学校「百年史」』p170
- 37) 敷島国民学校「昭和十九年度日直簿」「昭和二十年度日直簿」前橋市教育研究所所蔵
- 38) 境小九十周年記念事業実行委員会 1967 『境小九十周年記念誌』p85-87
- 39) 赤堀村誌編纂委員会 1978 『赤堀村誌（下）』p1635
- 40) 三小沿革誌刊行委員会 1975 『第三小学校百年のあゆみ』p31
- 41) 倉渕村誌編さん委員会 2011 『新編 倉渕村誌 第四巻 通史編』p563
- 42) 「沿革史 赤羽村国民学校」館林市教育研究所所蔵
- 43) 菊池 実 2007 「陸軍前橋飛行場物語（4）—昭和20年8月5-6日の前橋空襲を検証する—」『研究紀要25』p131
- 44) 高崎市市史編さん委員会 2004 『新編高崎市史 通史編4 近代現代』p938
- 45) 永井健児 1972 『あゝ国民学校』p60-64
- 46) 大類村史編集委員会 1979 『大類村史』p373-374
- 47) 群馬県立前橋商業高等学校 1993 『前商70年史』p81
- 48) 里見村誌編纂委員会 1960 『里見村誌 下巻』p899-900
- 49) 太田市立九合小学校 1973 『太田市立九合小学校百年のあゆみ』p123
- 50) 大泉町誌編集委員会 1983 『大泉町誌（下巻）歴史編』p1428
- 51) 菊池 実 2004 「陸軍前橋飛行場物語—一日米両軍の発掘史料から—」『研究紀要22』p436
- 52) 大間々町誌編さん室 2001 『大間々町誌 通史編 下巻』p565、同書や群馬県立大間々高等学校 2000 『大間々高校百年史』では移駐時期を7月としているが、注53)の資料から5月が正しいものと思われる。
- 53) 笠懸村誌編纂室 1987 『笠懸村誌下巻』p267-268
- 54) 敷塚本町小学校 1964 『敷塚本町小学校沿革史』p38、敷塚本町立敷塚本町小学校 1975 『百年のあゆみ 開校百周年記念誌』p87、90、敷塚本町誌編さん室 1995 『敷塚本町誌』p656

- 55) 総社町国民学校「昭和二十年度学校日記」前橋市教育研究所所蔵
- 56) 総社町誌編集委員会 1956 『総社町誌』p385
- 57) 邑楽町誌編纂室 1983 『邑楽町誌（下）』p1348
- 58) 「沿革史 明治6年～昭和31年 第七小学校」館林市教育研究所所蔵
- 59) 「沿革史 昭和2年～昭和36年 第六小学校」館林市教育研究所所蔵、尾形誠信 1994 『刮目 六小の120年』p61
- 60) 「沿革史 明治6年～昭和25年度 第八小学校」館林市教育研究所所蔵
- 61) 小林ふく 1973 『戦渦に生きた子どもたちー現場教師の記録ー』p105
- 62) 邑楽町立長柄小学校 1985 『長柄小100年の歩み』p45-47
- 63) 富岡高校七十五年史編さん委員会 1971 『富岡高校七十五年史』p633-636
- 64) 富岡市立富岡小学校 1973 『富小百年史』p83
- 65) 中野交友会 1978 『陸軍中野学校』p778
- 66) 南牧村誌編さん委員会 1981 『南牧村誌』p1153
- 67) 「明治5.5～昭和20.8.29 陸軍予科士官学校歴史 陸予士校」（中央軍隊教育予科士校1）防衛研究所所蔵
- 68) 中之条町誌編集委員会 1977 『中之条町誌第二巻』p631-633
- 69) 高原力三 1971 『我らの教育誌』p132
- 70) 中之条小学校PTA 1963 『中之条小学校九十年史』p32
- 71) 中之条町誌編集委員会 1977 『中之条町誌第二巻』p631-633
- 72) 原町小学校百年のあゆみ 1973 『原町小学校百年のあゆみ』p122-123
- 73) 群馬県立藤岡高等学校百年史編集委員会 1996 『目で見える藤岡百年史』p60
- 74) 電波監理委員会 1951 『日本無線史 第九巻』p168
- 75) 菊池 実 2005 『陸軍特殊（毒ガス）演習場の研究』『近代日本の戦争遺跡』p141-170
- 76) 林 吉栄編 1985 『沼田陸軍病院記念誌』p42
- 77) 群馬県立沼田女子高等学校創立50周年記念誌編集委員会 1972 『沼女五十年』p224-226
- 78) 沼田高等学校 1997 『沼高百年史 上巻』p163-164
- 79) 古馬牧村誌編集委員会 1972 『古馬牧村誌』p449-450
- 80) 蕨川小学校百年誌編集委員会 1976 『蕨川小学校百年誌』p54
- 81) 伊香保町教育委員会 1970 『伊香保誌』p561-562
- 82) 伊香保小学校百年史編集委員会 1978 『伊小百年のあゆみ』p139-140
- 83) 古馬牧村誌編集委員会 1972 『古馬牧村誌』p445
- 84) 松井田町誌編さん委員会 1985 『松井田町誌』p1060
- 85) 室田町誌編集委員会 1966 『室田町誌』p1335
- 86) 東村誌編さん委員会 1979 『東村誌』p968-969、1125
- 87) 中村 哲 2008 「東京陸軍被服本廠・朝霞作業所（東京陸軍被服支廠）の疎開についてー太平洋戦争開戦から終戦処理までー」『文化財研究紀要』第21集、p1-21
- 88) 松井田町誌編さん委員会 1985 『松井田町誌』p994
- 89) 群馬県勢多郡敷島村誌編集委員会 1959 『群馬県勢多郡敷島村誌』p773-775
- 90) 子持村誌編さん室 1987 『子持村誌 下巻』p437-439
- 91) 榛名高校五十年誌編集委員会 1990 『榛名高校五十年誌』p42、室田町誌編集委員会 1966 『室田町誌』p541
- 92) 「陸軍部隊調査表（其一～其四）」（中央軍事行政編制335）防衛研究所所蔵
- 93) 「沿革誌 昭和2年～昭和28年度 第三小学校」館林市教育研究所所蔵
- 94) 「沿革誌 明治6年～昭和30年 第四小学校」館林市教育研究所所蔵、館林市立第四小学校記念誌編集委員会 1989 『私たちの小学校誌ー第四小学校百十五のあゆみー』p77
- 95) 「沿革誌 明治6年～昭和31年 第七小学校」館林市教育研究所所蔵
- 96) 邑楽町立長柄小学校 1985 『長柄小100年の歩み』45-47
- 97) 「沿革誌 昭和元年～昭和14年、昭和15年～ 第一小学校」館林市教育研究所所蔵

- 98) 落合敏男 1995 『館林小学西舎』p82
- 99) 板倉町立北小学校記念誌編集委員会 1994 『桜が丘今昔ー板倉北小学校 百二十年誌ー』p66、p70
- 100) 「沿革誌 昭和20年～平成元年 第五小学校」館林市教育研究所所蔵
- 101) 邑楽町誌編纂室 1983 『邑楽町誌（下）』p1348
- 102) 倉渕村誌編さん委員会 2009 『新編 倉渕村誌 第四巻 通史編』p562-563
- 103) 群馬県史編さん委員会 1991 『群馬県史 通史編7 近代現代1』p740
- 104) 富士見村誌編集委員会 1954 『富士見村誌』p537
- 105) 福田文治 1970 『わが町の戦記（町長メモ）』p74、黒保根村誌編纂室 1997 『黒保根村誌3 近代・現代Ⅱ 軍事・産業』p168、安中市市史刊行委員会 2002 『安中市史 第六巻 近代現代資料編1 別冊付録 人々の暮らし』p127など参照
- 106) 太田市立強戸小学校 1994 『にったばり』p31
- 107) 群馬県勢多郡敷島村誌編集委員会 1959 『敷島村誌』p779
- 108) 南牧村誌編さん委員会 1981 『南牧村誌』p1153
- 109) 鳥之郷小学校創立百周年記念事業実行委員会 1976 『太田市立鳥之郷小学校百年のあゆみ』p46
- 110) 小野上村村誌編集委員会 1978 『小野上村誌』p536
- 111) 南八幡幼・小・中学校史編集委員会 1991 『南八幡幼・小・中学校史』p227
- 112) 蚕糸高校六十周年記念誌編集委員会 1973 『蚕糸高校六十年史』p332-333
- 113) 沼田高等学校 1997 『沼高百年史 上巻』p162-163
- 114) 富士見村立原小学校 1974 『原小学校「いまむかし」創立百周年記念誌』p38
- 115) 「沿革誌 昭和元年～昭和14年、昭和15年～ 第一小学校」館林市教育研究所所蔵
- 116) 高山村誌編集委員会 1972 『群馬県吾妻郡高山村誌』p1195

〔追記〕本稿脱稿後も調査を継続する中で、部隊通称号について陸軍史料中にも混乱があることがわかった。それは、新田生品の第303独立整備隊（燕第19086部隊）を「内地航空部隊通称号一覧表」（陸空中央編制用法93ー防衛研究所所蔵）によると燕19395部隊に、第19独立鉄道作業隊（線第33969部隊）についてを「治安に関する報告綴 昭和20.8参謀部」（本土東部224ー防衛研究所所蔵）によると線33965部隊としている、などである。これらについては今後も検討して行きたい。

また、勢多郡宮城村国民学校と佐波郡芝根村国民学校移駐の照空隊については、前者を1964年発行の『戦災と復興』p419、後者を2011年発行の『玉村町の戦争事跡』p52に依拠した。

なお、本稿執筆にあたっては群馬県立女子大学群馬学センターリサーチ・フェロー各位、県立図書館をはじめとする県内各地図書館のご協力、佐野市立図書館の高山様からは貴重な資料の提供をいただきました。記して感謝申し上げます。